高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

Community Contribution White Paper

# 地域・社会貢献白書

2024

高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

Community Contribution White Paper

# 地域・社会貢献白書

2024

# 地域・社会と共に歩む 高崎経済大学

高崎経済大学学長　水口 剛

経済格差の拡大や少子化、気候変動と異常気象、脱炭素化やAI・デジタル化に伴う産業構造の転換など、社会には課題があふれています。それらのどんな課題にも共通するのは「人」が解決の鍵を握るということです。本学は、充実した教育を通じて有為の人材を送り出し、彼らが社会で活躍することで課題解決に貢献するということを基本に据えています。そのために経済学や地域政策学をしっかり学ぶことはもちろん、ゼミ活動を通じて地域の現場にも足を運び、地域の人と一緒に汗を流す活動もしています。さらに、学生諸君に環境や社会の課題をより身近に考えてもらうために、第一線のオピニオンリーダーを招き、「世界と日本の未来を考える」と題した特別講義も展開しています。

また、個々の教員が研究の成果を通じて地域や社会に貢献することに加え、研究活動の中でさまざまな地域をフィールドとして、具体的に地域の支援もしています。今回の白書では特集としてそのような教員の活動も紹介しています。

より直接的な地域貢献活動の力になるのが、4,000人いる学生の力です。学生たちは部活動やサークル活動を通じて、さまざまな場面で主体的に地域貢献活動に取り組んでいます。本学の学生が運営する「cafeあすなろ」や、「熱血！高校生販売甲子園」は高崎市内の賑わいにも貢献していることと思います。さらに、学生ボランティア活動支援室では地域からのボランティアの派遣要請に応え、昨年度延べ1200人を超える学生をボランティアとして派遣しました。

本学は地域に根ざす大学として地域や社会の皆様と共に歩んでいきたいと願っています。この白書を通じて本学の学生や教職員による多面的な地域や社会への貢献の様子を感じて頂ければ幸いです。

# 地域・社会貢献白書

高崎経済大学理事長　市川 豊行

今年も、「地域・社会貢献白書」の発刊の運びとなりました。これで、6回目になります。2023年は、3年余りに渡って世界を苦しめてきた新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられ、大学の授業や課外活動も通常どおり行えるようになり、教員・学生のキャンパス内外での活動も活発に行われるようになってきました。

高崎経済大学は、教育研究活動はもちろんのこと、地域・社会貢献活動についても、多方面にわたって行っています。しかし、残念ながら、その実情は市民にはあまり知られていないようです。また、部分的には知られていても、全体像はどうかということになるとまず誰も知らないのではないかと思われます。それぞれの活動に対する評価は別として、「地域に根を張り世界と交流する知の拠点」を標榜する高崎経済大学として、そもそも地域・社会貢献活動として何をやっているのか、またそれはどういう体系的な考えのもとにやっているのかが明らかにされる必要があります。まさにそれらの活動を取りまとめたのが、この「地域・社会貢献白書」です。

今後、市民を中心とした皆様方と地域を共有し、さらなる地域貢献を目指すとともに、地域・エリアに捉われない社会貢献活動にも一層励んでいく所存です。是非、ご一読いただき、地域・社会貢献活動に対するご示唆をいただければまことに幸甚に存じます。



# INDEX


学長挨拶／理事長挨拶 …… 1

・特集１：「大学的群馬ガイド」発刊　安田慎准教授 …… 3-4

・特集２：2023産学官連携事例発表会　黒川基裕教授 …… 5-6

・特集３：特別講義「世界と日本の未来を考える」 …… 7-8

・特集４：地域課題研究　小熊仁教授 …… 9-10

知の拠点化推進室長　唐澤達之教授 …… 11

## ●研究による社会貢献

地域科学研究所 …… 13-14

宿場町・倉賀野を見る、歩く— 身近なまちの歴史探訪 —　鈴木耕太郎准教授 …… 15

高崎市の高崎北高校2年生の探求学習のインタビュー対応　佐藤敏久教授 …… 16

## ●教育による社会貢献

高大コラボゼミ　矢野修一教授 …… 19

群馬いろはでの学生協力活動　片岡美喜教授 …… 20

企業と学生の交流イベント　坪井明彦教授 …… 21

## ●課外活動による社会貢献

学生ボランティア活動支援室 …… 23

ボランティアサークルACT（アクト） …… 24

高崎まちなか教育活動センターあすなろ …… 25

「熱血！高校生販売甲子園」実行委員会 …… 26

起業サークル「SONOSAKI」 …… 27

高崎経済大学・国際交流協会 …… 28

高崎経済大学 陸上部 …… 29

高崎経済大学 直属 吹奏楽部 …… 30

就職活動支援における地域連携 …… 31-32

教員一覧 …… 33-34

ラジオゼミナール …… 35

高崎経済大学図書館紹介 …… 36

特集 1

# 「大学的群馬ガイド こだわりの歩き方」昭和堂

地域政策学部准教授　安田慎

## 群馬県の観光は語り尽くされているのか

群馬県の観光がにわかに注目を浴びるようになっています。メディア上では群馬県に関するさまざまな観光ガイドブックや旅行番組であふれ、旅行雑誌で群馬県が特集されることも増えてきました。観光をめぐって行政や観光産業、市民組織が新たな取り組みを展開していくなかで、群馬県の観光も新たなステージへと移ってきていると言えるでしょう。

群馬県民の間でも、観光を通じて地域振興を図っていこうとする動きが活発になるなかで、地域社会と観光は切っても切れないものになっていると言えるのではないでしょうか。観光化する社会のなかで、群馬県の観光はいかなる形で発展していくのか。そして、観光を通じて群馬県がいかに変わっていくのか。その姿を記録にとどめるとともに、未来に向けていかなる地域社会を構想していくのか。大学としても、研究者としても、変わりゆく社会の動きに関わっていくことが、地域社会から求められるようになっています。

上述の社会環境のなかで、研究者の立場から群馬県を眺めていくと、一般的な観光メディア類が発信する群馬県とは異なった姿がみえてくることが多々あります。そこでは、群馬県という舞台を通じて、人や社会がいかなるライフスタイルや人生といった個々のストーリーを私たちに語りかけてくるのか、その魅力を記録するなかで、研究者は地域社会を客観視していきます。あるいは、観光客数や観光消費額、移住者の増加といった数字以上に、観光によって地域社会にいかなる価値規範がもたらされるのか、その生成過程や伝播の現場を記録し、発信していくことで、人びとが気づかなかった地域社会の魅力を新たに生成することにもなるでしょう。

人や社会のストーリーや価値規範は多様であるとともに常に揺れ動くものであり、決して一つにまとめられるようなものではありません。しかし、その観光によってもたらされる多様なストーリーや価値規範の存在こそが、地域社会の豊かな姿を示す指標として捉えることができそうです。

群馬県内での研究活動や、ゼミでのフィールドワークをはじめとした、教育活動や社会貢献活動のなかで培ってきた、地域の知見やネットワークをいかに群馬県内外の社会に還元していくのか。大学としても、研究者個人としても、重要な課題となってきました。地域政策学部のなかに観光政策学科を有する高崎経済大学としても、地域社会に積極的にその成果を発信していくことは、地域に根差した大学としての一つの使命であるとも言えるでしょう。

観光政策学科をはじめとした執筆者たちは、一連の想いを常日頃の大学業務のさまざまな場面で感じてきました。そのなかで、昭和堂の「大学的地域ガイド」シリーズに群馬県版がないことが一つの契機となり、出版社に編者（安田慎）が企画を持ち込む形で、本書の編纂作業が始まることとなりました。

## COVID-19下での観光・観光研究・『大学的群馬ガイド』

2019年に出版企画がスタートし、出版社との企画調整が終わり、実際に執筆者たちが執筆作業に入ろうとした段階で発生したのが、新型コロナウィルス（COVID-19）をめぐる一連の社会的混乱でした。この間、フィールドの現場での研究調査や教育活動を行うことが難しくなっただけでなく、観光そのものが「不要不急」なものとして社会的批判にさらされ、観光そのものが忌諱される社会的風潮が醸成されてきたと言えます。そのなかで、広く観光研究に携わってきた執筆者たちにとっても、「観光とは何であるのか」、あるいは「観光とは地域社会にとって何者であるのか」という、普段あまり考えることのなかった根本的な問いに、真正面から対峙しなくてはなりませんでした。この問いに対する明確な答えは未だに出ていないと言えますが、新型コロナウィルスの世界をまさに「生き抜く」なかで、それぞれの執筆者たちが考えてきた観光と地域社会の関係をめぐる哲学が、分析手法や記述内容にも立ち現れているのではないでしょうか。その点で、本書が編まれた時代背景を含めて読み進めていくことも、また面白い点かもしれません。

また、新型コロナウィルスに翻弄される群馬県内の観光地や地域社会の存在をみるにつれ、観光研究者や地域の大学に所属する教員として、研究を通じて未来の方向性や可能性を描き出していくことが強く求められると感じることが多々ありました。本書は明確な形での政策提言や未来の予測をしている訳ではないのですが、過去や現状を分析していく過程で、それぞれの執筆者たちが、「未来の群馬県のあってほしい観光の姿」を描き出してきた、とも言えそうです。そうした視点で読み進めていくと、また本書の違った姿が見えてくるかもしれません。

## 現場を見ていくなかで知る群馬県の魅力たち

本書を編纂していく過程で、編者をはじめとした執筆者たちが、改めて自分たちのフィールドとなる観光地や観光実践について調べ直し、その過程で今まで知らなかったような場所や内容についても新たな知見を得るきっかけとなってきました。特に、執筆者同士でも本書の内容を読み比べていく過程で、自分たちの専門分野や研究対象以外の群馬県の魅力を新たに学ぶきっかけになったと言えます。その点で、本書の編集作業そのものが、執筆者たちの群馬県の知見を捉え直すきっかけとなったはずです。

さらに、本書の表紙や口絵の写真が必要となるなかで、本書で書かれた内容をベースに、編者が群馬県内各所をめぐっては写真を撮り続けていました。写真を撮影する過程で、本書で書かれていた内容を追体験することができたのも、振り返ってみるとよい体験であったと考えております。ぜひとも読者の皆さんにも、実際に本書の内容を読んだうえで、現地で写真を撮ってその旅行経験をまとめていく、という体験をすることで、より本書の内容理解が進むのではないでしょうか。

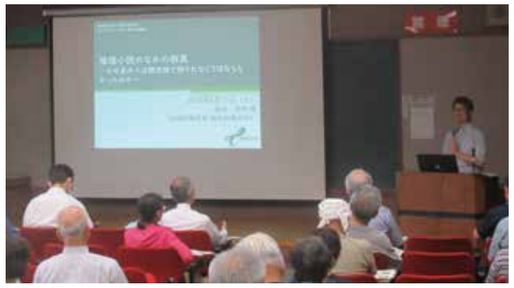
## 群馬県の観光をさらに発展させていくために

本書の刊行後、上毛新聞をはじめとする地域メディアに取り上げていただくとともに、群馬県内外の公立図書館や大学図書館への収蔵、さらに貸出が多く行われている点が特徴としてあげられます。さらに、地域科学研究所主催による連携公開講座（全５回）において、本書をテキストとした連続講演会を行い、100名近い一般市民の皆さんと意見交換を行う機会に恵まれました。本書についての好意的なご意見を頂くとともに、より地域についての詳細な調査や分析を行ってほしいとの叱咤激励も受け、今後の更なる研究・教育・社会貢献活動への理解と支援を頂けたものと確信しております。

本書は、大学の一部授業においてもテキストとして用いられています。群馬県外出身の学生たちにとっては、群馬県を知るきっかけとして、逆に群馬県内出身の学生たちにとっては、自分たちの生まれ育った地域社会を見直すきっかけとなっていました。さらに、学生や教職員の家族が、家族や知り合いにすすめられて本書を読み、群馬県のイメージを新たにするとともに、群馬県の観光について色々な会話が交わされるきっかけになっている点が、興味深い現象としてあげられます。その点で、群馬県の観光とは決して日常生活と離れた「非日常」ではなく、私たちの何気ない日常生活のなかに息づいている存在として捉えることができそうです。

さまざまな形で盛り上がりをみせる群馬県の観光ではありますが、本書がそうした潮流の一助になるとともに、観光を通じて地域社会に対する人びとの理解を高めていくきっかけとなることを願ってやみません。さらに現状に満足することなく、本書の内容をきっかけに、新たな地域社会の未来を構想していくきっかけとなってほしいとも考えています。

大学としても本書の刊行をきっかけとして、群馬県に関する大学や教職員のさまざまな活動を、書籍や講演をはじめとした活動を通じて、より広く社会に還元していきたいと考えています。群馬県民や高崎市民の皆さんには、次なる研究成果をぜひ期待して頂くとともに、大学の研究・教育・社会貢献に関わる更なる支援をお願いする次第です。



特集 2

# 研究成果の「見える化」と社会還元の加速化を目指して

地域政策学部教授　黒川基裕

## 1．研究室の概要

地域政策学部・黒川研究室は、途上国の発展に貢献する開発経済学を専攻する経済系の研究室として2003年から歩みを続けてきました。当初は、タイ国の自動車産業を中心に産業開発や技術移転の研究を続けてきましたが、2010年頃からデザイン学の視点も加えるようになってからは、領域の幅が広がり、研究活動にも独自性が生まれるようになりました。

途上国向けの商品企画・開発やマーケティングの経験蓄積がある手前共の研究室は、「技術とデザインで途上国を彩る」というメッセージを発しながら、生活改善につながる製品の企画・開発に取り組んでいます。現在進行中の研究テーマは、以下の３つです。

1．調理時の煙害を抑制する「改良クッキングストーブ」の開発
2．ヒ素やフッ素の除去に適応する「家庭用浄水器」の開発
3．アジアの米麺文化の普及に資する「米麺製法」の簡便化

これらについて、机上での商品企画に留まらず企業の皆さまや現地の大学との共同開発を推進することで、具体性を持った研究成果の社会還元を目指しています。将来のビジネス展開の候補地となる実証実験のためのプロジェクトサイトもアジア地域からアフリカ地域まで広がってきました。現在、ベトナム・ハノイ地域、インドネシア・バンテン州、チュニジア・ジェンドゥーバ地域、ガーナ・アクラ地域の４地点にサイトを構えています。

すべてのプロジェクトには、学部学生が参画しており、プロジェクトの推進がPBL（Project-Based Learning）の機会となっていますが、指導教官によるオンサイトの指導を超えて、企業の皆様との協働の機会が学生を即戦力に育てることにつながっていると感じています。

## 2．産学官連携推進事業の成果

上記で紹介したプロジェクトのうち、改良クッキングストーブのプロジェクトは、高崎市商工観光部から公募があった令和５年度・産学官連携推進事業に採択していただきました。改良クッキングストーブの研究自体は、2018年から続けてきたものですが、今回は以下の研究目的についてサポートしていただくことになりました。

1．これまでのプロトタイプ９機（うち現地投入４機）のデザインレビューと現地調査の結果をもとに、機能強化した量産モデル（NK-02機）を製作する。
2．同モデルをベトナム・ハノイ郊外のプロジェクトサイトに持ち込み、村落でのデモンストレーションによる潜在需要調査と個別家庭における消費者使用テストを実施する。
3．最終的な量産モデルの設計と、将来に向けたビジネス展開を構想する。

産学官連携ということですから、学外には掛け替えのないパートナーを擁しています。まずは、研究開始当初からプロトタイプの製作や現地調査の推進にご協力いただいている高崎市吉井町の有限会社山崎製作所です。板金加工を基点とした多角的な展開にお取り組みの山崎社長には、他のプロジェクトにもアドバイスをいただいております。一方、ベトナムでは、ベトナム国家大学のHa教授の研究室がコラボレータになっています。現地調査を実現するためには、適切なカウンターパートの存在は必要不可欠ですが、特にベトナムの場合は社会主義国として法令関係が複雑です。技術的なインプットに加えて、サイトの選定や政府関係者との交渉など、水先案内人としての彼女の参画がなければ、現地調査は実現できなかったことでしょう。

さて、第１段階のNK-02号機の開発では、1．燃焼時間をさらに伸ばす、2．2022年のインドネシア調査で抽出した潜在需要（床に座って調理したい）を設計変更に反映させる、という２点を開発目標として設定しました。２つの開発目標には、技術的な相反性がある中、山崎製作所で打ち合わせを積み重ね、実験と設計変更を繰り返した結果、最終的には、高さを抑える一方で外部から2次燃焼用の空気を取り込める構造のNK-02号機が完成しました。外装の材料が増えた分、機能が安定していない空気調節機能を除いたのですが、原価低減にまで関心が及ぶのが「産」の視点がある良い点かと思います。

第２段階の実証実験は、2023年8月にベトナム共和国・ハノイ郊外の農村をフィールドとして実施されました。現地では、これまでの現場と同様に、デモンストレーションおよび消費者使用テストを実施しました。

住民のうち、約40名が参加したデモンストレーションでは、煙害への啓発を目的としたプレゼンテーションと持ち込んだNK-02機のデモンストレーションを実施したところ、着火の簡便性や火力の強さを中心に参加者からの高い関心が寄せられました。

村の集会場でのデモンストレーションの後は、会場で4家庭を選定し、各家庭を訪問し使用方法を説明しながらテスト機を据え付け、3日間の使用テストを開始しました。被験者の評価は良好で、11項目中9項目で70％以上の評価を得ることができました。一方で、評価が低かったのは、「燃焼時間」と「火力調節」となり、今後の課題も明確になりました。

## 3．研究成果の公表とその後の展開

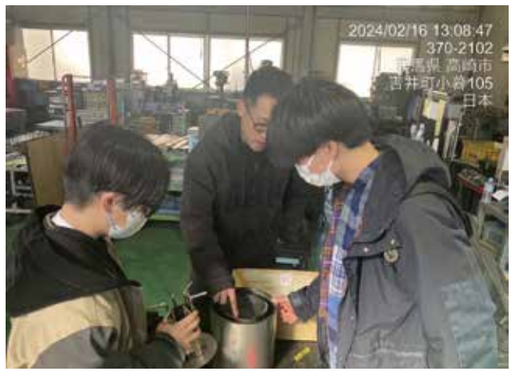
この研究成果は、2024年2月8日に高崎市産業創造館で開催された公立大学連携事例発表会で報告しました。社会科学系の研究室としては、エンジニアリング面での成果に加えてビジネスモデルやマーケティングにも意識が向いていることが期待されるところ、学生はそれらを踏まえた報告をしてくれたと思います。これは、協力企業の皆さんと近い距離で研究に取り組んでおり、経営者の視点というのはどのようなものなのか、民間企業で働くスタッフの方はどのような心構えで仕事に取り組んでいるのかを体験してきたことに起因していると思います。

改良クッキングストーブの研究成果は、国際学会でチュニジアのNGOの目に留まり、2024年2月末にはアフリカ向けに設計変更したモデルを準備してチュニジアでの実証実験に挑みました。すると、オリーブオイルの生産が盛んな同国では、オリーブの絞り粕の廃棄が問題となっており、「これを燃料にできないか」という打診からペレット燃料のローカライズに取り組むというプロジェクトが始まることになりました。このような急な打診にも対応できるのは、複数国でカウンターパートづくりに挑んできた研究室の経験蓄積があることに加えて、関係構築が進んでいる協力企業さんが身近に寄り添ってくださるおかげです。

## 4．地域企業と海外市場をつなぐ

パンデミックによる社会変容やAIの普及によって世の中が新しいステージへと向かっていく中で、大学はその存在意義が問われる状況にあると思います。私自身も10年近く中小企業の経営に携わりながら、大学に向けられる厳しい声にさらされてきました。その経験を踏まえながら、研究成果をアセットとして正しく咀嚼し、企業の皆様に「人材」、「商品企画案」、「国内外の人的ネットワーク」の3点セットをご提供するというかたちで研究成果の「見える化」に取り組み、厳しい批判に耐えうる研究室づくりに取り組まなければならないと考えています。

黒川研究室との連携では、研究成果にたどり着くまでの長い道のりをご一緒いただくことになりますが、その一方で簡単にはアクセスできない途上国のリソース（辺境地の農村、政府機関、ローカル企業など）に触れていただくことができます。手前共との連携が、地域企業の皆様の本格的な海外展開支援につながればと願っています。



特集 3

# 特別講義「世界と日本の未来を考える」

## 学生自身が課題解決を体感する授業

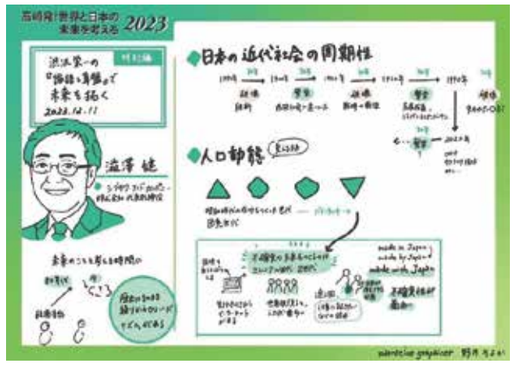
いつも私たちの予想を超えて展開する「未来」。そんな「未来」を起点として今やるべきことを考える、バックキャスティングと呼ばれる思考方法のスキルや、今般のコロナ禍など先の見えない「正解のない時代」を生き抜くためのリテラシー（知識・能力）は、教室の座席に座って、ただ講師の話を聴いている受動的な授業では身に付けることができません。

この授業は、地球規模の課題や技術革新の分野において第一線で活躍している方々の「講義」と、その「講義」をヒントに学生がチームを結成して新規事業案を企画する「グループワーク」を組み合わせたプロジェクト型学修プログラムとすることにより、学生がこれらのスキルとリテラシーを獲得すること、社会課題の解決に向けて自ら考え、行動できる人材へと成長することを目指しています。

## 第一線で活躍する方々を講師に迎えて

この授業は、持続可能でより良い社会の実現を目指すための世界共通の目標であるSDGs（Sustainable Development Goals）をテーマとして全15コマの内容を設定し、地球上の「誰一人取り残さない」社会の実現のために私たちは何をしたらよいのか、地球規模の課題を学生自身が自分ごととして考え、答えを導き出すことも目的としています。

SDGsの17の目標における各分野の第一線で活躍する方々を講師に迎え、SDGsの達成状況だけではなく、国際社会や各地域が抱える課題と企業の取組などの知識を学ぶことができるような内容としており、学生は社会の現実をきちんと理解し、その社会が自身の人生に影響することも自覚します。熱い想いを持った講師の方々の講義は、毎回密度が濃く、学生が回答する「授業に関する学生アンケート」の結果も学部・大学全体の評価を大きく上回り、学生たちにとって魅力的な授業となりました。




講義「特別編」の一部（グラフィックレコーディング）

## この授業でしかできない経験

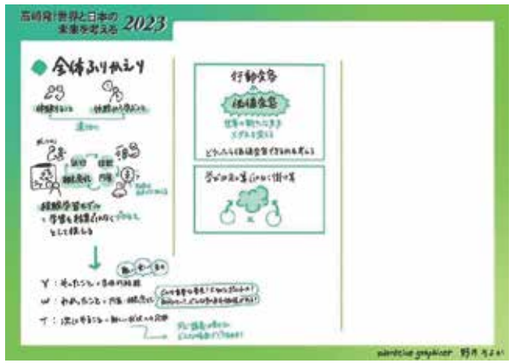
授業の後半では、学生は3～8人のチームに分かれ、前半の「講義」を中心に得られた知識や理解を基に、企業の立場で社会課題の解決のための新規事業案を考えました。

| | 講師名（職名は開講当時のもの） | テーマ |
|---|---|---|
| 1 | 井澤　友郭（NGO こども国連環境会議推進協会　事務局長） | イントロダクション |
| 2 | | スキル演習（問う力とファシリテーション） |
| 3 | 中山　泰男（セコム株式会社 代表取締役会長） | セコムの未来イノベーション～社会課題を解決する |
| 4 | 湯浅　誠（認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長） | コロナと居場所こども食堂の取り組みから |
| 5 | 大崎　麻子（NPO 法人 Gender Action Platform 理事） | なぜ、世界はジェンダー平等を目指すのか～SDGs から考える国際潮流と日本の課題 |
| 6 | 平田　仁子（一般社団法人 Climate Integrate 代表理事） | 気候危機とコロナ危機における日本のリデザイン～地域循環共生圏の創造 |
| 7 | 井澤　友郭 | 問いづくりとチーム結成 |
| 8 | 飯塚　優子（住友林業株式会社執行役員 サステナビリティ推進部長） | 森林の力で世界を変える |
| 9 | 宮井　真千子（森永製菓株式会社取締役常務執行役員） | 食の力で世界を変える |
| 10 | 石川　和也（日本電気株式会社 Integrated Marketing 統括部 プロフェッショナル　兼　エバンジェリスト　NEC　Community　Accelerator ） | デジタルの力で世界を変える |
| 11 | 加藤　有也（一般財団法人社会変革推進財団事業部インパクト・オフィサー） | 事業を通じて社会を変える～インパクトスタートアップの世界 |
| 12 | 井澤　友郭 | 新規事業の開発～課題の深堀りとリソース活用～ |
| 13 | | プレゼンシナリオの制作 |
| 14 | 櫻井　蓮（ＦＵＴＵＲＥＮＡＵＴ株式会社　代表取締役 CEO） | 学生時代の起業とイマ、学生時代にやってよかったこと |
| 15 | 井澤　友郭 | 全体リフレクション |

2023（令和5）年度 全15コマの講師・テーマ

学部や学年が異なる学生同士のグループワークは、最初は遠慮が見られたものの、次第に積極的に自分の意見を伝えられるようになり、意見をぶつけ合いながら新規事業のアイデアを高めていきました。ときには意見が合わずに企画が白紙に戻ることもありましたが、他の授業ではなかなかできない経験が、コミュニケーション能力の向上につながりました。

各チームで企画した新規事業案は、チームごとにスケッチブックリレーによるプレゼン動画にまとめ、講義に協力いただいた企業だけでなく、学生同士で相互評価を行い、表彰を行いました。




受賞した新規事業案（グラフィックレコーディング）

## 特別編として

令和５年度は特別講義の特別編として、シブサワ・アンド・カンパニー株式会社の代表取締役であり、新１万円札の肖像モデルとなった「日本資本主義の父」である渋沢栄一の5代目子孫、澁澤健氏を講師に迎え、「渋沢栄一の『論語と算盤』で未来を拓く」をテーマに、今日の経済、社会、企業活動を振り返りつつ、日本社会のあるべき姿と企業経営についてお話いただき、「インパクト投資」などに関して、詳しい説明を聴く機会を設けました。

ビジネスの第一線で活躍する方を目の前に、社会で実際に起きているできごとや課題について直接聴く授業は、学生にとって非常に刺激的であり、学生が自ら考え、行動する力を身に付ける後押しを受けた授業となりました。

澁澤氏と学長の対談の様子

## おわりに

受講した学生からは、「グループワークでリーダーシップを身に付けたい、他人と協力して物事を進めていく人にこの授業を勧めたい」「やる気のある人が多いので、自分のやる気を上げてほしいという人、一緒に頑張る仲間が欲しいという人にもお勧め」「変化を恐れない学生にもこの講義を勧めたい」など、楽しかったという学生が多く、授業を高く評価する声が寄せられました。

4年目を迎える今年度も、何事も他人任せにはせず、主体的に自身ができることに取り組む学生が1人でも増えるよう、この講義を開講します。

※ 昨年度の講義の情報はこちらからご覧いただけます。
高崎経済大学ホームページ 特別講義「世界と日本の未来を考える」
https://www.tcue.ac.jp/leafpage/1436.html

特集 4

# 家族や地域の支えは免許返納の動機を生み出すのか？

地域政策学部教授　小熊仁

## 本研究の問題意識と目的

警察庁の統計によると、2023年度のわが国における運転免許所有者数は、前年度と比べおよそ2.2万人増の8186.2万人に上っています（東京都を除く）。このうち、65歳以上の免許所有率は26.4％（1168.9万人）を占め、前年度から0.3％ほど増加しています。こうした高齢者ドライバーの増加は少子高齢化が背景にあることは言うまでもありませんが、これによって、彼らが引き起こす自動車事故が大きな社会問題となっています。

そこで、国は1998年から運転免許証の自主返納制度を開始し、これまでにのべ452.2万人の高齢者が運転免許証を返納しました。しかし、返納者の多くは公共交通機関が発達した大都市圏の高齢者によって占められており、日常の移動手段を自動車に頼らざるを得ない地方都市の高齢者は、日々運転に不安を抱えながら運転を継続しなければならない状況に置かれています。その一方で、地方都市であっても運転免許証を返納する高齢者は一定程度存在し、例えば群馬県では2023年度に5775人もの高齢者が運転免許証を返納しています。

では、地方都市の高齢者はどのような動機から運転免許証を返納するのでしょうか。また、返納の動機にはどのような要素が影響を与えるのでしょうか。本研究では以下の仮説を立て、2022年8月4日～2023年3月27日、ならびに2023年9月25日～2024年2月20の間にかけて（公財）高崎交通安全協会において運転免許証を返納した高齢者298名のアンケート結果から分析を行いました。

【仮説1】高齢者による運転免許証の動機は自ら進んで返納する「自律的動機」と家族・知人などからの勧めや説得により返納を行う「他律的動機」がある。地方都市の場合、自動車はもはや生活必需品であり、運転を取りやめることは、自身が納得する理由がない限り難しい。したがって、運転免許証の返納は主に前者の動機によって構成される。

【仮説2】家族・知人からの勧めや説得は運転免許証返納の動機とはなりにくい。むしろ、このような家族や地域のつながり・支えは返納後の満足度に影響を与える。

## 分析結果

### (1)　返納の動機

運転免許証の返納理由を把握するため、表1に示す12項目について回答してもらい（複数回答可）、数量化Ⅲ類を用いて類型化を行いました。その結果、相関係数が0.5以上となる軸が4つ抽出されました。1つ目は「身体能力の低下・ドクターストップ」軸です。これは更新以前にドクターストップがかかっており、更新に向けて再度認知症検査を受けた結果、医師から更新不可と診断されたグループです。2つ目は、「身体能力の低下・居住環境充実」軸です。これは更新時の認知症検査において医師から更新不可と診断された一方で、自宅周辺の公共交通が充実していることから返納しても困らない人のグループです。3つ目は、「身体能力の低下・事故や違反の経験」軸です。この軸は、過去に事故や違反を繰り返してしまい、更新時の運転技能検査、あるいは認知症検査により更新不可と判断されたグループが該当します。

最後に、「ドクターストップ・事故や違反の経験」軸です。これは事故や違反を繰り返し、更新以前に医師からドクターストップがかかったグループです。いずれの軸も自身の身体的理由を要素としており、逆に家族や知り合いの勧め、特典等の付与は返納の動機にあまり影響を与えていないことがわかります。つまり、返納者は自身の身体能力の低下をある程度自覚し、「諦め」の感情を持ちながら返納に至っているのではないかと考えられます。このことは、返納後の感想に対する回答にもあらわれており、運転免許証の返納に対し全体の86.9％が「返納して本当に良かった」「返納してまあ良かった」と回答しています。このことから、【仮説1】の通り、返納の動機は「他律的動機」よりも「自律的動機」によるところが大きく、返納者はある程度の諦めと納得をもって返納している可能性が高いと言えます。

### (2)　返納後の満足度に与える影響

では、家族や地域のつながり・支えは何に影響を与えるのでしょうか。本研究では返納後の満足度にこれらが与える影響を検証するため、1人暮らしを除いた217名を対象に順序ロジットモデルと順序プロビットモデルを利用し返納後の感想と「家族機能尺度得点（家族のまとまり＝凝縮度の強さをスコアにしたもの）」、および「あいさつ・立ち話に行く人の有無」「行事・会合に一緒に行く人の有無」「困った時に助けてくれる人の有無」の関係を分析しました。その結果、「家族機能尺度得点」は1％有意で係数が正の値を示し、「あいさつ・立ち話に行く人の有無」は10％有意（順序順序プロビットモデルは5％有意）で係数が負の値を示しました（表2参照）。

つまり【仮説2】の通り、家族や地域のつながり・支えは返納後の満足度に影響を与え、家族のまとまりが強い人ほど返納後の満足度は高くなる傾向にあり、「あいさつ・立ち話に行く人」がいない人ほど返納後の満足度が低くなる可能性があることが明らかになりました。このことから、円満な家庭環境や良好な近所づきあいを日頃から意識し過ごしておくことが納得のいく免許返納に結びつく可能性があります。人々のライフスタイルが変化している現代においてこうした環境を作り上げるのは容易ではありませんが、充実した老後を過ごすためにも過去にいま一度振り返って自らの生活を見直していく必要がありそうです。

## おわりに

本研究は高崎市地域交通課、ならびに高崎交通安全協会の石関様からの多大なご厚意によりすすめることができました。アンケートにご回答頂きました市民の皆様ありがとうございました。この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

| 変数名 | 第１軸 | 第２軸 | 第３軸 | 第４軸 |
|---|---|---|---|---|
| | 身体能力の低下<br>ドクターストップ | 身体能力の低下<br>居住環境 | 身体能力の低下<br>事故・違反の経験 | 事故・違反の経験<br>ドクターストップ |
| 家族や知り合いにすすめられた | 0.181 | -0.420 | 0.124 | -0.744 |
| 検査により更新できないことがわかった | 6.112 | 3.825 | 5.652 | -2.494 |
| 事前にドクターストップがかかった | 6.002 | -1.019 | -4.135 | 3.484 |
| 特典がもらえる | -0.382 | -0.061 | -0.373 | -0.074 |
| 車にかかるお金が節約できる | -0.295 | 0.591 | -0.205 | 0.004 |
| 困らない場所に住んでいる | -0.722 | 2.244 | -0.314 | 1.829 |
| 事故や違反をくりかえした | -0.545 | -3.781 | 5.507 | 5.498 |
| 運転する体力や気力がもたない | 0.250 | -1.489 | -0.233 | -0.390 |
| 他人に迷惑をかけたくない | -0.074 | -0.181 | 0.058 | -0.343 |
| 事故のニュースを耳にした | -0.299 | 0.096 | 0.025 | -0.036 |
| いずれ返納は必要だと思った | -0.169 | 0.250 | -0.005 | 0.060 |
| 世のためになる | -0.393 | -0.004 | -0.653 | -0.912 |
| 累積寄与率 | 17.7% | 30.1% | 41.6% | 52.7% |
| 相関係数 | 0.654 | 0.546 | 0.527 | 0.517 |

表1　返納動機の類型化

| 説明変数 | 順序ロジットモデル | | | | 順序プロビットモデル | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 係数 | t 値 | p 値 | 判定 | 係数 | t 値 | p 値 | 判定 |
| 男性 | 0.3686 | 1.3733 | 0.17 | | 0.2147 | 1.3366 | 0.18 | |
| バスの運行本数 | -0.7997 | -1.7929 | 0.07 | * | -0.4841 | -1.7536 | 0.08 | * |
| 友人関係<br>（あいさつ・立ち話） | -1.3609 | -1.8905 | 0.06 | * | -0.7393 | -2.5838 | 0.01 | ** |
| 家族機能尺度得点 | 0.0737 | 3.4762 | 0.00 | *** | 0.0399 | 3.5506 | 0.00 | *** |
| 閾値 | | | | | | | | |
| 本当に良かった<br>→まあまあ良かった | -0.4705 | -0.5112 | 0.61 | | -0.2723 | -0.5260 | 0.60 | |
| まあまあ良かった<br>→ややしない方が良かった | 0.9500 | 1.0861 | 0.28 | | 0.4324 | 0.8888 | 0.37 | |
| ややしない方が良かった<br>→しない方が良かった | 3.6080 | 3.9737 | 0.00 | *** | 1.9863 | 4.0832 | 0.00 | *** |
| N | 217 | | | | | | | |
| AIC | 2.0461 | | | | | | | |

表2　返納後の満足と家族・地域のつながり（*:p<0.10、**: p<0.05、***:p<0.01）

# 多角的な地域・社会貢献への取組：研究・教育・課外活動

知の拠点化推進室長　唐澤達之

本学では、地域における知の拠点としての機能を発揮するため、知の拠点化推進室を設置しています。知の拠点化推進室は、地域連携を進める取組の主なものとして地域科学研究所の事業と高大連携事業とを統括していますが、本学の地域・社会貢献活動は、部局の枠組みを超えて、また教育・研究活動から学生の課外活動に至るまで様々なレベルで取り組まれています。本白書は、これらの活動に関する情報を集約し見える化を図ることで、その全体像について情報発信することを目的としています。今回の白書では、2023年度の1年間の活動を紹介しています。

本学の地域・社会貢献活動は、貢献の主体を軸にすると「教員による貢献活動」と「学生による貢献活動」とに分けることができますが、その内容を軸とすると「研究による社会貢献」、「教育による社会貢献」、「課外活動による社会貢献」の3つに分けることができます。この内容を軸とした分類にしたがって、本白書の目次は構成されています。

本学は、学則にもあるように、教育・研究を通じて地域の向上発展に貢献することをミッションとしており、地域・社会貢献に資する研究を進め学術的にも高い評価を受けている多くの研究者を擁しています。そこで、本白書では、地域・社会貢献に資する学術研究を特集で取り上げました。また、社会課題の解決を自分ごととして考え、自ら答えを導き出すことのできる人材の育成は、教育機関としての本学のミッションであり、こうした観点からの特色のある取組として、特別講義「世界と日本の未来を考える」を特集で取り上げました。

## 研究による社会貢献

まず、長年にわたり地域連携に取り組んできた地域科学研究所の取組として、プロジェクト研究、公開講座・連携公開講座、地域めぐり、地元学講座、あすなろ市民ゼミなど、市民への知の還元の取組を紹介しました。また、様々な活動のなかから、本白書では、倉賀野での地域めぐりと、地域の高校の探求学習との連携をトピックとして取り上げました。

## 教育による社会貢献

地域連携の組織的な取組として、高崎経済大学付属高等学校を始めとする地域の高等学校との高大連携事業を紹介しています。高崎経済大学付属高等学校との連携は、「高崎市と世界をつなぎ、地域に貢献できる人材の育成」を目指す『TSUBASAプロジェクト』を通じて強化されています。

本学では、地域政策学部を中心に地域課題を研究テーマとして取り組むゼミナールが多いことが特色ですが、本白書では、ゼミナールの教育活動におけるProject-based Learningの例として、高崎市の物産PR活動と企業と学生の交流イベントを取り上げました。

## 課外活動による社会貢献

本学では2018年、学生ボランティア活動支援室を設置し、学外からのボランティア要請と学生をマッチングするだけでなく、本学の学生が提案したボランティア企画の実現にむけて支援するなど、様々な取組をしています。2022年度からは、支援室に学生協働スタッフを設置し、教職員と学生が一体となって啓発活動に取り組んでいます。

本学には、課外活動においても、地域・社会貢献を目的とした学生団体がたくさんあります。本白書では、それらのなかから、ACTによる地域振興・地域活性化活動、「cafeあすなろ」によるコミュニティカフェの運営、「熱血！高校生販売甲子園」による商品開発・販売のコンペの企画、起業サークル『SONOSAKI』による学生と企業の共創による地域活性化活動、国際交流協会による地域住民の文化交流、陸上部による地域スポーツ振興、吹奏楽部による地域における訪問演奏活動を紹介しています。

本白書で紹介した地域・社会貢献活動のいずれにおいても、地域社会のみなさま方からは、貴重な研究のフィールドや課題発見のチャンスを、また貢献活動を通じた学生の成長の場を提供いただいていることに改めて感謝を申し上げる次第です。これらの取組がどれほどの成果をあげているのかは、市民のみなさまの評価を待たねばならないところですが、「地域・社会貢献と研究・教育の発展の間に好循環を生み出す」ことが、地域・社会貢献活動の大きな成果であり、またそのような好循環こそが活動の持続性を担保するのだと思います。今後も少しでも地域社会の役に立てるよう努めてまいります。

地域・社会貢献活動を通じた本学と地域・社会の関係

# 研究活動による社会貢献

# 2023（令和5）年度地域科学研究所活動報告

地域政策学部教授　地域科学研究所 所長　佐藤徹

2023年5月、新型コロナウイルス感染症に関する感染法上の分類が、2類から季節性インフルエンザと同じ5類へと引き下げられました。これに伴い、公開講演会、連携公開講座、秋の連続講座、あすなろ市民ゼミ、地域経営セミナー、地元学講座、地域めぐりといった各種の事業は、原則として対面形式で実施されました。講師の先生方をはじめ、関係各所の皆様のおかげでこれらを遂行することができました。あらためて感謝申し上げます。

また、プロジェクト研究の成果物としては、書籍1冊とブックレット2冊を発刊することができました。以下では、写真を交えながら、ご紹介いたします。

## 【公開講演会】

◆ 第19回：「知の創造と読書」（2023年7月21日（金）高崎経済大学図書館ホール）

多摩大学大学院経営情報学研究科教授であり 100年企業戦略研究所所長の堀内勉氏をお招きし、「知の創造と読書」と題して講演いただきました。

公開講演会：第19回　堀内勉氏

◆ 第20回：公開シンポジウム『「ものづくりシティ」高崎の躍動～独自技術を誇る高崎発ものづくりのグローバル展開と最新動向～』（2024年2月28日（水）高崎経済大学7号館731教室）

2022年3月に刊行した『地方製造業の躍進―高崎発ものづくりのグローバル展開―』（日本経済評論社）において、調査にご協力いただいた高崎市のものづくり企業の経営者を招き、各企業のビジネス動向から、今後の展望まで議論を交えながら語っていただくシンポジウムを開催しました。

公開講演会：第20回　（公開シンポジウム）

## 【連携公開講座】

高崎市中央公民館にて、5月20日から6月17日にかけて5回にわたり、本学教員5名による高崎経済大学連携公開講座を開催しました。

## 【公開講座】

◆ 第40回：「現代社会への多面的アプローチ」

10月16日から12月13日にかけて、本学教員による全10回の公開講座を開催しました。

## 【あすなろ市民ゼミ】

cafeあすなろにて本学教員による少人数のゼミナールを開講しました。9月13日から10月25日までの全4回のゼミナールでは、各回を担当する教員がそれぞれのテーマによる事前課題に基づいた学習・討論が行われました。

あすなろ市民ゼミ

## 【地域経営セミナー】

◆ 第6回：「自治体のDX化」（2023年11月27日（月）高崎経済大学図書館ホール（ハイフレックス型））

基調講演には、東京都デジタルサービス局サービス開発担当部長である荻原聡氏を迎え「東京都庁におけるDXの取り組み」の講演が行われました。

## 【地元学講座】

◆ 第15回：「もっと誇れる群馬～『群馬の地酒』で楽しい、幸せな時を～」（2023年7月20日（木）高崎経済大学図書館ホール（ハイフレックス型））

群馬SAKE TSUGU 代表 清水大輔氏を迎え、利根川・烏川・渡良瀬川など、水資源が豊富な群馬の食文化としての地酒／日本酒、その生産者の取り組みについて講演いただきました。

地元学講座：第15回　清水大輔氏

◆ 第16回：「映画のまち・高崎　いままでとこれから」（2023年10月17日（火）高崎経済大学図書館ホール）

高崎映画祭プロデューサー／NPO法人たかさきコミュニティシネマ代表理事／シネマテークたかさき総支配人である志尾睦子氏を迎え、高崎から発する映画と映像文化の今日までの発展と今後について講演いただきました。

地元学講座：第16回　志尾睦子氏

## 【地域めぐり】

◆ 第14回：「高崎市のものづくり企業をめぐる」（2023年8月4日（金））

コーディネーター：藤本哲所員（経済学部教授）

群栄化学工業株式会社、株式会社ユタカ製作所、株式会社町田ギヤー製作所を訪問し、その発展の歴史と現在、今後の展望について学びました。

◆ 第15回：「宿場町・倉賀野を見る、歩く～身近なまちの歴史探訪～」（2023年12月9日（土））

コーディネーター：鈴木耕太郎所員（地域政策学部准教授）

中山道の宿場町の一つとして、また烏川を用いた舟運による物流の中心地として栄えた倉賀野。そんな倉賀野宿を歩き、今でも往時の様子を感じることができる場所をコーディネーターである鈴木所員の解説を交えながらめぐりました。

地域めぐり：第15回

## 【プロジェクト研究】

2019～2022年度「地方都市中心市街地研究－人口減少時代におけるまちづくり－」をテーマとする研究が、『地方都市における中心市街地の課題―人口減少時代とまちづくり―』（日本経済評論社）として結実しました。

## 【高崎経済大学ブックレット】

⑩『スポーツで高崎を変える―ソフトボールシティへの挑戦』

スポーツの社会的機能の考察を通して、地域科学研究所・高橋伸次所員（地域政策学部教授・スポーツ社会学、スポーツ行政・政策論）が執筆いたしました。

本書では、「スポーツで高崎を変える」政策の一環として強調されている「ソフトボールシティ高崎」への動向を俯瞰しています。そして、現状から見えるソフトボールシティとしての課題や可能性について展望しています。

⑪『地方都市における中心市街地の課題―人口減少時代とまちづくり―』

高崎経済大学地域科学研究所が2024年2月に日本経済評論社から刊行した『地方都市における中心市街地の課題－人口減少時代とまちづくり－』のダイジェスト版です。

高崎市中心市街地の歴史的発展の経緯、形成された個性を意識しつつ、類似した問題を抱える国内都市の事例、あるいは先進的な試みを行っている国内外都市の事例研究、理論研究、実証分析を通じて、中心市街地で生じる諸問題について論じています。

# 宿場町・倉賀野を見る、歩く――身近なまちの歴史探訪――

地域政策学部准教授　鈴木耕太郎

2023年12月9日（土）、冬だというのに空っ風も吹かず、非常に穏やかな天候のもと、地域科学研究所の主催の「地域めぐり」が実施された。場所は倉賀野。今回、多数の方がご応募くださり、抽選の結果、市民8名（うち1名は体調不良でご欠席）に加え、本学の学部生も4名が参加してくださった。

コーディネーターとして倉賀野での地域めぐりを企画したのには理由がある。3年前、「倉賀野河岸」と「倉賀野宿」を卒論のテーマにしたゼミ生がいた。最終的に5万字を超える大作で、こちらとしては読むだけでも大変だった。が、そのお陰で倉賀野という場所が、近世においては物流、交通の要衝だったことがわかった。率直に言えば、ここまで重要な場所とは思ってもみなかった。そんなこともあり、地域めぐりを担当することが決まったとき、まず思い浮かんだのが倉賀野だった。

2023年8月10日、研究支援チームの高橋さん（当時）、井野さんと私とで中山道の宿場町・倉賀野の下見を行った。集めてきた資料を参照しつつ実際に歩いてコースを決めていったのだが、そこで強く感じたのは「知っていればわかる／知らなければ通り過ぎる」ということだ。

歴史的な建築物や往時を語る碑など宿場町としての歴史的面影を倉賀野はまだ残している。しかし、面的というよりも点として存在するため、一見してそこが宿場町だとわかる人はそう多くはいないだろう。烏川沿いにあった倉賀野河岸はさらに目立たない。もちろん知っている人からすれば高崎周辺、いや群馬県全体の歴史を語るうえでも欠かすことのできない旧跡であり、そこにあることは自明なのだが、おそらくそういう人は多数ではない。

一方で倉賀野宿も倉賀野河岸、あるいは倉賀野全体の歴史について、もっと市民に知ってもらおうと活動している方々もいる（たとえば、倉賀野観光ガイドの会など）。こういう活動を通して、身近な歴史を掘り起こす。今まで何気なく素通りしてきた道を、街を、立ち止まって見て楽しむ――換言すれば地域の魅力、地域の持つポテンシャルを再発見、再評価していくことは重要だ。私が目指した「地域めぐり」はまさにそこにある。見て歩く、そして知る、楽しくなる、もっと知りたくなる――こうした好循環をつくり出すことが、地域に根差した研究活動を地域の人たちにアウトリーチする、ということになろう。

さて倉賀野の下見から戻り、再度経路を検討する。下見で十分ポイントは抑えられた気もしたが、個人的には少々物足りない。そこで取り出してきたのが倉賀野の伝説が記された書籍類。国文学を専門としている立場としては各地に残る伝説の舞台も地域めぐりの舞台になり得ると考えた。こうして実在する史跡と当地に残る伝説の舞台とを組み合わせたコースが完成した。

さらに高崎市観光ガイドの会会長の三澤憲一さん（倉賀野在住）や元市役所職員で本学にも勤務されていた永田和也さんがオーナーを務められる「さんぽ屋」さん、倉賀野町おもてなし館の皆様、倉賀野神社宮司の高木直明さん、そして私のゼミ生で倉賀野町在住の髙橋里湖さん、細村和花さんといった方々のご協力・ご助力も仰げることとなり、倉賀野めぐりの下準備は整った。

かくして地域めぐり当日となった。旧中山道沿いから倉賀野河岸、井戸八幡宮、冠稲荷神社、倉賀野おもてなし館、九品寺、そして倉賀野神社と進み、最後はバスで群馬の森まで向かって、河川運搬のあり方やダイナマイト工場跡地を見て終わりとなった。結果としては、当初の目論見通り、倉賀野地域の歴史を見て歩き、知って楽しむことが出来たと自負している。もちろんこの成功の背景には、ご参加くださった皆様の「学ぶ」姿勢と前述した協力してくださった地元の皆様、さらに事務局のお2人のご尽力あってのことである。この場をお借りして御礼申し上げたい。ありがとうございました。

群馬の森にて講師の説明を受ける参加者

高崎ゲストハウス&カフェ さんぽ屋 永田 和也 氏

視察の様子　烏川の記念碑



# 高校生の「探求学習」への協力

経済学部教授　佐藤敏久

2023年7月に群馬県立高崎北高校の生徒から、「探求学習」への協力依頼がありました。

この学生の「問い」は、「CDの売上数が減少している理由はどのようなことで、消費者の購入意欲を高める効果的な方法は何か」であり、自分なりの仮説は、「売上が減少している理由はネット上で手軽に音楽を楽しむことが出来るようになったから」で、対応策として、「購入意欲を高める方法は、購入者特典を豪華にする」を考えているが、次のことについても意見が欲しいと書いてありました。そのまま書くと、①売上の減少にはどのようなことが関係するのか（仮説：もっと優れたものが市場に登場したとき）、②消費者はどのようなものに購入意欲をそそられるのか（仮説：自分にとってプラスになるものを見たとき）、③企業は売上を上げるために商品開発、商品宣伝　営業のどの工程に一番力を入れるべきなのか（仮説：商品宣伝だと思う）というものでした。

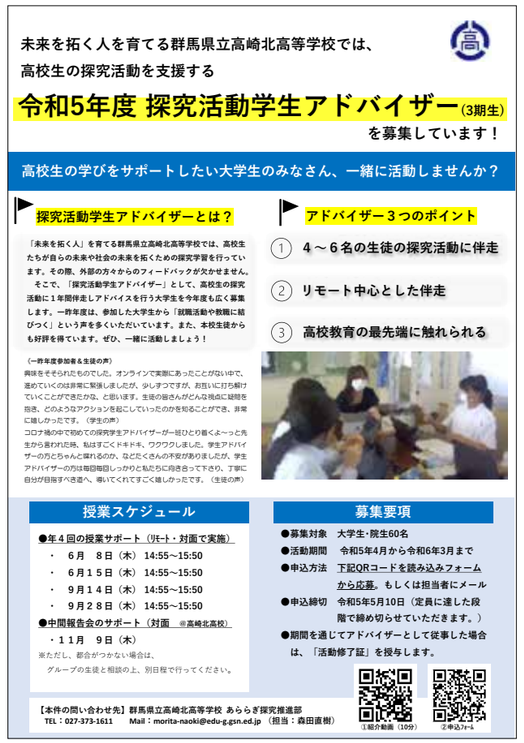
リサーチクエスチョンや仮説がどうあれ、高校生の段階で行われるこうした思考訓練は喜ばしいものです。

わたくしからの回答は、まず、「CDの売り上げが減少した理由」として、①CDレンタル業者が登場し、CDのコピーができるようになったこと、②インターネットの普及とipod（MP3プレーヤー）やiphone（スマートホン），配信サービスが登場したこと（配信サービスというドミナントデザインが登場したこと）、③CDを再生する機器が減り（CDは再生する機器を売るために生まれた）、音楽がスマホで完結するようになったこと、④テレビやラジオで音楽をかけることが減ってしまったこと（マスが知らない曲を認知する機会が減少）、⑦音楽以外に楽しめるものが増えた（アニメーションや映像，旅行やグルメなど）、⑧部屋で本やレコードと同様に保管場所が必要、⑨リサイクル市場が縮小していったこと（BtoCではなく、CtoCで市場拡大）

次に、「②消費者はどのようなものに購入意欲をそそられるのか（仮説：自分にとってプラスになるものを見たとき）」について、①消費者はニーズを持っていて，それを満たすために商品やサービスを購入するという考え方があり、ニーズは理想と現実のギャップで、そのギャップを埋めようとする行為を問題解決という。売り手側はその問題解決に役立つ，ギャップを埋めることのできる製品やサービスを提供しようとする．これを消費者との何らかの接点を使って伝え、この商品は自分にとって価値があると思えば、購入に至ることもある。と回答しました。

実際には、A4で4枚にまとめ回答をしましたが、最終的に、この生徒はこの探求学習を論文にまとめ、私に送ってくれました。読んでみて、私からの回答にもきちんと向き合い、疑問点を解消し、脳に汗をかきながら書いたかと思うと、お互いによい経験をしたと思います。もしかしたら、この生徒がこのまま「問い」と「仮説」を鍛え続け、世界が驚くような商品やビジネスを生み出してくれるかもしれません。今回の協力がその一助になったとしたら研究者としても教育者としても望外の喜びです。

高崎北高校の「探究活動学生アドバイザー」に本学学生も参加しています。



未来を拓く人を育てる群馬県立高崎北高等学校では、
高校生の探究活動を支援する

**令和5年度 探究活動学生アドバイザー（3期生）**
を募集しています！

高校生の学びをサポートしたい大学生のみなさん、一緒に活動しませんか？

**探究活動学生アドバイザーとは？**

「未来を拓く人」を育てる群馬県立高崎北高等学校では、高校生たちが自らの未来や社会の未来を拓くための探究学習を行っています。その際、外部の方々からのフィードバックが欠かせません。
そこで、「探究活動学生アドバイザー」として、高校生の探究活動に1年間伴走しアドバイスを行う大学生を今年度も広く募集します。一昨年度は、参加した大学生から「就職活動や教職に結びつく」という声を多くいただいています。また、本校生徒からも好評を得ています。ぜひ、一緒に活動しましょう！

（一昨年度参加者＆生徒の声）
興味をそそられたものでした。オンラインで実際にあったことがないゆで、進めていくのは非常に緊張しましたが、少しずつですが、お互いに打ち解けていくことができたかな、と思います。生徒の皆さんがどんな視点に疑問を抱き、どのようなアクションを起こしていったのかを知ることができ、非常に嬉しかったです。（学生の声）
コロナ禍の中で初めての探究学生アドバイザーが一対ひとり着くよ～っと先生から言われた時、私はすごくドキドキ、ワクワクしました。学生アドバイザーの方たちゃんと聞けるのか、なだたくさんの不安が残りましたが、学生アドバイザーの方は毎日毎回しっかりと私たちに向き合ってくださり、丁寧に自分が目指すべき道へ、導いてくれてすごく嬉しかったです。（生徒の声）

**アドバイザー３つのポイント**

① ４～６名の生徒の探究活動に伴走
② リモート中心とした伴走
③ 高校教育の最先端に触れられる

**授業スケジュール**

●年４回の授業サポート（リモート・対面で実施）
・ ６月　８日（木） 14:55～15:50
・ ６月１５日（木） 14:55～15:50
・ ９月１４日（木） 14:55～15:50
・ ９月２８日（木） 14:55～15:50
●中間報告会のサポート（対面　※高崎北高校）
・１１月　９日（木）
※ただし、都合がつかない場合は、
グループの生徒と相談の上、別日程で行ってください。

**募集要項**

●募集対象　大学生・院生60名
●活動期間　令和5年4月から令和6年3月まで
●申込方法　下記QRコードを読み込みフォームから応募。もしくは担当者にメール
●申込締切　令和5年5月10日（定員に達した段階で締め切らせていただきます。）
●期間を通じてアドバイザーとして従事した場合は、「活動修了証」を授与します。

【本件の問い合わせ先】群馬県立高崎北高等学校　あららぎ探究推進部
TEL：027-373-1611　Mail：moritta-naoki@edu-g.gsn.ed.jp　（担当：森田直樹）
①紹介動画（10分）　②申込フォーム

# 教育による社会貢献

# 「高大コラボゼミ」を通じたグローカル人材育成

経済学部教授　矢野修一

日本企業のケーススタディを通じ、専門的知識・英語力・コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力を高めるとともに、進路・キャリア意識の涵養を図ることを目指す「高大コラボゼミ」は、2010年、高崎経済大学・矢野ゼミ3年生と高崎市立高崎経済大学附属高校3年1組生徒との間で始まりました。走りながら考えたようなプログラムですが、2024年度で15年目を迎えています。早いものです。

今では、高経大・阿部圭一ゼミ3年生の指導を得ながら高経附2年1組の生徒が「日経ストックリーグ」に参加するプログラムも定着しています。コラボゼミは、高経附の探究学習の大きな柱であり、同校の人気を高めるファクターのひとつとなっています。

「ゼミ」という以上、教室内での一方的座学と違い、高校生もグループ内で実際に発言し議論しなければなりません。一方、大学生は「教えることを通じて学ぶ」を実践します。いかなる内容・事象であれ、本当に理解していなければ、高校生に教えることはできないからです。

私の担当するコラボゼミでは、高校生・大学生混成の6グループが6つの日本企業について、並の就活生など及びもつかないほど綿密に研究します。高校生と大学生は、6社の統合報告書、IR資料、新聞・雑誌・テレビのニュースや解説などを材料に議論を積み重ね、企業の沿革、同業他社の動向、中期経営計画の意味、株主総会の様子、新興国の経済状況などについて、4カ月にわたり研究を深めていきます。

その後、実際に企業を訪れ、インタビューをしたのち、8月、研究成果を発表します。主役は高校生です。大学生はサポート役に徹します。高経大の大教室において、英語を交えながら、数百名の聴衆の前で成果が披露されます。

2020年から2022年までは、新型コロナ感染拡大の影響で、メインイベントである企業訪問・インタビューは、残念ながらオンラインを余儀なくされました。2023年度は、経営支援NPOクラブ（大企業を退職された方々による社会貢献団体）など関係各方面のご協力により、久々のリアル訪問が実現し、大陽日酸、DM三井製糖、リコー、ランスタッド、ポニーキャニオン、ソニー・ピクチャーズエンタテインメントといった、業種・業態も様々な各社にお邪魔しました。

本社に足を踏み入れ、居並ぶビジネスパーソンに質問を投げかけ、やりとりするのは、緊張の連続です。しかしながら、入念な準備ののち、直接対面してお話を聞くことによって、高校生・大学生とも「世界は誰かの仕事でできている」を実感できたと思います。オンラインは確かに便利ですが、やはりリアルな訪問にはかないません。各社訪問後、東京・八重洲に戻ってきた高校生・大学生の達成感溢れる笑顔がそれを物語っていました。

高大コラボゼミは、高崎発の「高・大・産・老」連携教育モデルです。開始以来、各方面から注目され、新聞や雑誌でも取り上げられました。本学産業研究所（現・地域科学研究所）でも『高大連携と能力形成』（日本経済評論社、2013年）の中で中間的総括を行いました。今では、高大コラボゼミを経験した高校生300名以上、大学生150名以上が国内外の各地域・各方面で活躍しています。

高大コラボゼミを通じた「グローカル人材」の育成は、高崎経済大学による地域貢献のひとつです。私は2026年3月をもって本学を定年退職となりますが、高大コラボゼミがこれからも有為の若者を育む貴重なプログラムであり続けることを願っています（コラボゼミについて、詳しくは、高崎経済大学ブックレット⑦『高崎からのグローカル人材育成』をご覧ください。高崎経済大学ホームページから閲覧・ダウンロード可能です）。

# 高崎じまんと協働した高崎市の物産ピーアール

地域政策学部教授　片岡美喜

この取組の契機は、高崎市役所観光課の課長である松田和也氏との関わりからである。同氏から高崎の観光・物産に関するなんらかの協働ができればという話を受け、本ゼミにて高崎市の観光に関する現状と課題について説明をしていただいた。

片岡ゼミ16期生は、松田氏からの話を受けて高崎市の観光や物産に関するSWOT分析を行った。この分析からは、高崎駅を降りたってのまちなか観光に関する情報が乏しいこと、多数の農産物や特産品の魅力をより伝えてゆくことの重要性を抽出した。3年生内での研究グループは、高崎市内のまちなか観光に関する研究を行うチームと、市内農産物振興を中心に研究するチームのふたつにわかれ、後者のチームが以下で述べる取り組みに関わってゆくことになる。

このプロジェクトに関わった本ゼミ3年生の7名の学生達は、高崎市の農産物・加工品を通じた「持続可能なお土産による地域振興」に取り組んだ。研究を進めてゆくなかで、高崎オーパにある高崎市産品のセレクトショップである「高崎じまん」への現地調査を行った。同店は、高崎観光協会が母体となり2017年に設置された店舗であり、農産物、各種加工品、製菓類、酒類、雑貨など、合併町村を含めた高崎市産品を販売している。

ゼミ学生らによる高崎じまんでの現地調査では、同店マネージャーの菅田氏から市内農産物を活用した取り組みについてお教えいただいた。同店では、出荷する農業生産者や加工事業者に対して消費者に価値や魅力を伝えるためのアドバイスに努めるほか、観光協会との協働事業として『高崎銘菓・名産品開発事業』を展開し、市内産の原材料を中心とした新商品開発の実施とその販売をしている。これらの調査から、ゼミ学生らは高崎産農産物や加工品の魅力を大いに感じたと同時に、菅田氏から課題としてお教えいただいた「若者のお客さんが少ない」現状に対して、自分達が貢献できるのではないかと考えるようになった。

ゼミ生達は調査成果をもとに、「群馬に縁がある若者世代が高崎の魅力を認識し、帰省土産として高崎をじまんしてもらいたい！」という考えのもとで、高崎じまんでの売り場づくりに取り組んでゆくこととなった。

特設売り場を行う際の商品の選定条件として、2023年10月に大学生を中心とした若者を対象に行った『お土産に対するニーズ調査』（回答数：115人）の結果を踏まえ、次の5点を設定した。① 高崎産の原材料を使っている、② 高崎のご当地感があるデザイン、③ 若者が手を出しやすい値段（1500円以下目安）、④ 知られざる魅力を伝える商品である。

多数ある商品のうち、上記の条件をもとにしながら、ゼミ学生らは実際に試食を重ねて「高崎野菜のおかげですクッキー」、「まるっと高崎」、「Takasaki financier」、「焼きチョコだるま」、「Takasaki Fruits Sand」の5商品を選定して、これらを核とした売り場づくりを行うこととした。

菅田氏と何度も打ち合わせを重ねながら、「高崎の人が高崎で作った高崎産のバズ土産」という売り場タイトルを銘打ち、ゼミ学生たちは売り場のPOPのデザイン、解説文を作成していった。扱う商品はいずれも高崎市産の農産物が原材料で使われていること、各店のこだわりがあるものであるため、それを読みやすく、目を引き、魅力が伝わる装飾にするよう時間をかけて作成していった。

売り場設置は、2024年の2/15（木）～2/29（木）の間に行われ、高崎じまんの入口のうち、駅に近い最も目立つ場所に設置させていただいた。そして、会期中の連休3日間は学生達が実際に店頭に立ち、来訪したお客様に声をかけて商品アピールを行った。この結果、同店の魅力ある地産地消の特産品を学生の観点から伝えられたこと、また前月比20%増の売り上げになったとのことで、学生達による活動にて一定の成果が得られたものと考える。

# 企業と学生の交流イベント

地域政策学部教授　坪井明彦

## 活動の経緯

3年生の演習ではグループで課題に取り組むPBL(Project-based Learning)を重視しています。コロナ禍ではそのような活動ができませんでしたが、2023年度はコロナ禍も落ち着いてきたことから、ゼミナールの卒業生が代表を務める株式会社キャリコに協力してもらい、PBLの課題案をいくつか提案してもらいました。その中で、2つの課題に取り組むことにしました。

## 群馬県のものづくり企業(製造業)の魅力を知ってもらうバスツアー事業(群馬県主催)のツアー企画・運営補助

1つが、大学生および若い転職希望者向けに、群馬県のものづくり企業(製造業)の魅力を知ってもらうバスツアー事業(群馬県主催)のツアー企画や企業との打ち合わせ、当日の運営補助というものです。このツアーは年間数回実施されていますが、8月8日開催の「吉本芸人と行く！　ぐんま就活バスツアー　柔軟な社風コース」(主催:群馬県労働政策課、運営:株式会社キャリコ)を担当しました。具体的には、イベントのプロモーションや、当日のバスの中でのアトラクションとしてのクイズ作成などです。参加者の満足度は高かったのですが、参加者の集客という点では課題が残りました。学生にとっても、集客の難しさを実感する機会になったと思います。

## ピザとキャリアの交差点

そして、もう1つが、新規に開業する前橋市のフリースペース「GITY」のマーケティング・プロモーション企画という課題でした。概要としては、前橋の街中に新設される学生向けフリースペースが7月頃オープン予定なので、競合分析、オープン後に実施するイベント企画、プロモーション企画の提案や一部実施を行うというものでした。

この課題は内容が漠然としていたので、自分たちでどのようなイベントをやるかなど、具体的に決めていく必要がありました。さらに、オープンも予定より遅れ、どのような場所かも具体的にはわからない中で、企画を考える難しさもあったと思います。そうした中で、最終的には、「ピザとキャリアの交差点」と題して、11月7日(火)に、群馬県企業と学生の交流イベントを実施することになりました。ピザを食べながらリラックスした雰囲気で、普段話をする機会が少ない社会人と大学生が交流し、新しい繋がりを築いてもらうことを目的としました。

開催日時:2023年11月7日(火)18:30～20:30
会場:前橋フリースペース『GITY』　群馬県 前橋市
　　千代田町2-2-11 GSレジデンス2階
参加企業:株式会社インターゾーン、株式会社一条工務店群馬、株式会社アサヒ商会、株式会社上毛新聞、しののめ信用金庫

◆タイムテーブル
18:00～　受付開始
18:30～　オープニング(イベント説明、企業説明)
19:00～　交流会開始
20:30　　エンディング

参加した学生としては、3年生は業界研究や企業研究の参考となる機会になり、また、1、2年生は就職活動やキャリアビジョンを意識し始める良い契機になったと思います。また、参加した社会人としても、所属する企業の認知拡大だけでなく、学生との情報交換の場として有意義な時間となったと考えるため、目的を達成できたと思います。しかしながら、参加学生数は、企画等に携わったゼミ生3年生9名を除くと、13名となり、当初目標としていた15名には至らなかったため、集客に関しては課題が残る結果となりました。

これらの活動を通じて、学生にとっては、群馬県内の企業や社会人の働き方を知る上で貴重な機会になったとともに、イベントの企画運営の難しさや、それ以上に集客の難しさを知る貴重な機会になったと思います。ご協力いただいた県内企業の方々やこのような機会を提供いただいた株式会社キャリコ様に感謝いたします。

# 課外活動による社会貢献

# 学生ボランティア活動支援室

学生ボランティア活動支援室長　唐澤達之

2018年5月、本学に学生ボランティア活動支援室が開設されてから丸6年が経ちました。支援室開設の目的は、地域社会から寄せられるボランティアの要請への対応と、ボランティア活動に関心と意欲を持つ学生に対する支援を通じて、地域社会貢献と学生の成長の間に好循環を生み出すことにあります。

開設以来、学生ボランティア活動支援室は、学外からのボランティア要請を受け付けて学生に対して情報を提供する一方、ボランティア活動を希望する学生に登録してもらい、ボランティア活動に関する研修を実施して、ボランティアの要請と学生とをマッチングすることを基本的な役割のひとつとしてきました。その後支援室の活動が軌道に乗るのに伴い、その活動のウィングを広げてきました。学内のボランティア団体との連携を強化するために、ボランティア活動に関わる学内の学生諸団体との情報交換会を実施して学生のボランティア活動の実績を蓄積し、また、学内ボランティア団体と合同で新入生向けに説明会を実施して、社会貢献活動の啓発を行っています。さらに、市内３大学(高崎商科大学・高崎健康福祉大学・新島学園短期大学)との情報交換会を実施して、各大学におけるボランティア活動に対する組織的な取組と、地域社会からのボランティア要請に関する情報の共有を進めています。

2023年度の活動について特筆すべきは、新型コロナウィルス感染症が5類に移行され、ボランティア活動に対する様々な制約が取り払われたこともあり、活動全体がコロナ禍以前と比べても活発になったことです。ボランティア要請受諾件数は60件(2022年度は48件)、ボランティア派遣者総数は1,203人(2022年度は770人)へと著増しました。ボランティア活動に対する地域社会の要請と本学学生の関心の高まりを実感しているところです。また、2022年度に設置された学生協働スタッフも定例会議を軸としてより主体的・組織的に活動するようになりました。

まだまだ手探りで進めているところですが、今後も、地域社会からのボランティア要請に応えながら、学内のボランティア団体との連携の強化と啓発活動を通じて、地域社会貢献に積極的に取り組むマインドの醸成に寄与したいと思います。

## 2023年度の主なボランティア活動先

- 群馬県警大学生少年サポーター
- NPO法人等無料学習支援
- 環境フェア2023
- 高崎市内小中学校放課後学習支援
- 高崎まつりボランティアリーダー、一般ボランティア
- 前橋トライアスロンフェスタ
- たかさきハロウィン実行委員
- キングオブパスタ
- 倉渕アジサイの会
- みのわの里きつねの嫁入り
- T-GRAP ごみ拾い × GPS ランアート（当室企画審査会受賞団体）
- WIN-WIN プロジェクト農作業（当室企画審査会受賞団体）
- 孫の手プログラム（当室企画審査会受賞団体）
- おる～ちぇ。（当室企画審査会受賞団体）

## 学生協働スタッフ

学生協働スタッフは2022年に設置され、学生ボランティア活動支援室に所属し、学生の立場から支援室の運営に教職員と協働で携わり活動してもらっています。学生協働スタッフには本学の学生に対して、ボランティア活動の啓発・推進のためのイベント企画やボランティアをより身近に感じてもらえるようなサポートをお願いしています。支援室の活動趣旨を理解し、学内外におけるボランティア活動の啓発に協力でき、支援室の運営会議、学生協働スタッフの活動に必要なミーティングに参加できる学生を募集しています。2023年度の活動として、「ボランティアサークル新歓合同説明会」の開催(4月)、学生協働スタッフ企画の啓発イベント(7月)、「ボランティアフェスティバル」の参加(2月)の他に、「小学生大学キャンパスツアー」や「学内献血ティッシュ配り」等があります。「ボランティアフェスティバル」は学外での活動となり、他大学と連携して各大学のボランティアセンターの広報や学生スタッフ同士の交流など、様々な活動をする中で学内では得られない学びがありました。今後も学生の学びと実践の場にしたいと思います。



# 地域と共に歩み続けるために

ボランティアサークルACT(アクト)

## Area Cooperative Team（地域に協力的な組織）略してACT

私たちボランティアサークルACT(アクト)は主に大学周辺地域の方々と交流・協力し、地域振興・地域活性化を目的とした活動を行っています。主な活動としてサークルのメンバーや多くの方々と共に協力して地域の方々に向けた様々なイベントを企画しています。また、多くの地域の方々からボランティアやイベントのお手伝いの依頼をいただき、参加することで地域の方たちと交流する楽しさ・やりがいを感じています。2023年度の活動内容としては、北部公民館の職員の方に協力していただき地域の子供たちを対象として“夏のお祭り”をテーマにした「ACT祭」やサンタクロースがやって来る「クリスマス会」を大きなイベントとして企画しました。他にも北部学童の子供たちとわたあめ作りを行う、地域の老人ホーム「ようざん」を訪問させていただき入居者の方々と交流する、地元のお祭りである「わくわくカーニバル」の運営補助、「高崎ユネスコ協会」の方々のイベントのお手伝いなど様々な活動を行いました。ここではACT主催のイベントであり、北部公民館で行われる「ACT祭」と「クリスマス会」について詳しく紹介したいと思います。

## ACT祭

ACT祭とは、北部公民館の職員の方の協力のもと、毎年７月に地域の小学校低学年・保育園児を対象に大学近くの北部公民館で開催するイベントです。北部小学校・塙保育園・たいせいこども園にチラシやポスターを配って宣伝しています。どうしたら子供たちに楽しんでもらえるかを考えながら企画・準備・運営を自分たちでしています。2023年度は保護者の方も含めて80人ほどの来場者となりました。出し物は磁石魚釣り・輪投げ・ボウリング・スライムづくりの四つでした。毎年の恒例として工作が１つ、ゲーム性のあるものが３つとなっています。どの出し物もチームの創意工夫が見られ、大学生から見ても面白いです。何度もゲームをしてくれる子供たちが多く、とてもやりがいのあるイベントでした。子供たちが喜んでいるところ見るとイベントを開催して本当に良かったと感じています。また、自ら企画や運営をして子供たちと接することはとてもいい経験になりました。

## クリスマス会

クリスマス会は、毎年12月に北部公民館で開催している地域の子どもたちを対象としたイベントです。このクリスマス会は地域の図書ボランティアの方々と私たちACTで行っています。ACTの催し物として2023年度に企画したのは、クリスマスリース作りです。折り紙やシールを使って、子どもたちに手作りのオリジナルクリスマスリースをつくってもらいました。私たちはリースの作り方を教えたり、一緒に作ったりしながら子どもたちと交流しました。子どもによって様々な色やデザインのクリスマスリースができました。最後には私たちがサンタの格好をして子どもたちにお菓子を配りました。クリスマス会を通して子どもたちが真剣にリース作りに取り組んでいる姿や完成して喜んでいる姿を見ることができてとても嬉しかったです。今後も子どもたちに楽しんでもらえるようなイベントを企画していきたいです。

## 今後に向けて

私たちボランティアサークルACTは多くの方々の支えがあるからこそ活動できていると実感しています。いつも支えて下さる方々に恩返しの気持ちも込めてこれからも活動していきたいと考えています。そして、地域と共に歩み続け、地域のために貢献できるよう尽力します。

ACT祭　ボウリングの様子

ACT祭　磁石魚釣りの様子

# 高崎まちなか教育活動センターあすなろが運営する「cafeあすなろ」

高崎まちなか教育活動センター　あすなろ

## 名曲喫茶「あすなろ」の誕生

1957年「郷土を美しい詩と音楽で飾ろう」という理念のもと誕生したあすなろでは、群馬交響楽団の演奏会や、有名詩人による詩の朗読会などが開催され、高崎市民の文化的活動の拠点として親しまれていましたが、高度経済成長の潮流と社会環境の変化などから、惜しまれつつも1982年に25年間の営業に幕を下ろしたのでした。

高崎市にあすなろをもう一度と市民の声が集まり、高崎市が高崎経済大学にあすなろの復活とその運営を依頼し、NPO法人を立ち上げるという形で、2013年にコミュニティカフェ「cafeあすなろ」が高崎市鞘町に再び、明かりを灯しました。

## 現在の活動と目的

### Management of the students

「cafeあすなろ」での活動のすべてが、社会に出て役に立つ実践的な学びであると考えています。

- イベント企画
- メニュー開発
- 広報活動
- 地域との交流

・多様性を認識し、コミュニケーションができる
・経済に通じ、地域を見る目を持って国内外において活躍できる学生を育成する。

### Management by the students

「cafeあすなろ」は、高崎市及び、高崎経済大学の支援のもと、学生が中心となり運営をしています。

**高崎市・高崎経済大学**

▼

**高崎まちなか教育活動センターあすなろ**

▼

- **経営班**
  メニュー開発、売上分析 等
- **企画班**
  イベント企画、運営 等
- **広報班**
  店内外広報活動 等

### Management for everyone

私たち学生は、高崎市や地域の方々に勉強の場を提供していただいています。 それに応えるため、積極的に地域の活性化に貢献したいと考えています。

「cafeあすなろ」から…

地域イベントへの参加協力
市民団体への施設貸出
文化発信の拠点としての充実
学生の成果発表の場

▶ 高崎市活性化のために



# ぼくらの力が地域を変える

「熱血！高校生販売甲子園」実行委員会

## 熱血！高校生販売甲子園

「熱血！高校生販売甲子園」は、群馬県内外の高校生が地域の特産品や、特色を生かした商品を開発して実際に販売活動を行うイベントです。私たち大学生は実行委員として「舞台は街なか、主役は高校生、それを支える大学生」のスローガンのもと、企画・運営を行っています。令和5年度第16回大会では12校12チーム合計73名の高校生が参加しました。また、令和6年度第17回大会では、5年ぶりに高知県からの出場が決定し、徐々にコロナ前の勢いを取り戻しつつあります。

### 主役は「高校生」

出場高校は、「売上・利益」に加え、審査員による「接客・演出・地域性」等の審査、一般投票の合計点によって総合的に順位決定されます。単に利益を追求するだけでは優勝は難しく、いかに独創的で魅力的な商品を販売するのかが腕の見せ所です。大学生のサポートを受けながら、高校生は商品を一から考案していきます。商品開発は、地域の特産物、文化や歴史などを改めて調べ直すことから始まります。そこで新たな気づきを得て、商品のアウトラインが決まったらレシピや設計図を考案し、原価をもとに価格設定を行います。また、多くのお客様の目に留まるよう、セールス手法やテント装飾にも工夫を凝らします。大会当日は、来場者の方々を意識し販売活動を行うことで、大会を通して貴重で有意義な経験を得ることができます。

### 第16回大会テーマは「じもと、いいとこ再発見！」

第15回大会を経験し、今後も継続して開催できるよう、販売甲子園の基礎となる「高校生×地域×大学生」を改めて振り返りました。そこで、地域密着型イベントとして高崎や群馬全体の活性化に繋がる活動をしたい思いを踏まえ、「地域」に焦点を当てた大会運営を行い地域に根付いた開催を目指しました。高校所在地の食材や文化を活用した商品はもちろんのこと、地元についてのクイズ「じもと、いいとこ再発見クイズ」や、それぞれの地元の「いいとこ」を書き出し共有する参加型ボード企画を実施しました。また、高校生は商品だけにとどまらず、地元のＰＲに繋がるテント装飾の作成にも力を入れて取り組みました。高校生、大学生、来場者が大会テーマやそれに沿った活動に関わることができ、特に高校生や大学生は１年間の商品開発を通して、それぞれの「じもと」について考えることができました。

### 販売甲子園当日

第16回「熱血！高校生販売甲子園」は高崎の大手前通りにて、通常通り対面での開催を成功させました。高校生は地元の特産品を用いた商品・ＰＲ活動・テント装飾で販売甲子園を盛り上げ、多くの高校で商品を完売することができました。高校生の頑張りや、輝きに感動を覚えた実行委員、来場者の方も多かったはずです。また、高校生は大学生の企画した交流会や、開会式・閉会式などにも参加し、有意義な経験をすることができたでしょう。地域や、高校生の方々、実行委員の仲間のおかげで2日間のイベントは大成功で幕を下ろすことができました。

### 次の世代へ熱血！を

第17回のテーマは「つなげる つたえる」に決まりました。販売甲子園を通じて年代属性関わらず、多くの方々とつながり、地域社会との関係をより強くするとともに、販売甲子園の持つ理念や理想が次の世代へつながるような大会運営を目指します。私たち大学生の熱い想いを原動力に、地域社会へのさらなる貢献につながる大会を目指していきます。

# 起業サークル『SONOSAKI』について

起業サークル『SONOSAKI』

起業サークル『SONOSAKI』は、高崎経済大学の学生を中心とした団体で、学生と企業の共創により群馬を一歩先へ進めることを目指しています。団体創設3年目となった2023年は、『その先を照らせプロジェクト』という企業が抱える問題に大学生・高校生の視点から解決策を提案するイベントを開催いたしました。

## プロジェクト概要

『その先を照らせプロジェクト』は、2023年11月25日と26日に開催されました。初日は高崎経済大学、2日目は群馬県庁32階NETSUGENで行われ、群馬県内の高校生・大学生40名が参加しました。

プロジェクトの目的は、学生と企業の共創を促進し、実地問題解決を通じて地域活性化を図ることです。具体的には、「大和屋のコーヒーを学生目線の新しいアイデアを用いて若者のファンを獲得せよ！」といった各会社から出されたテーマについて、学生たちは企業の社員と共に議論を重ね、提案をまとめました。

| 参加企業 | テーマ |
|---|---|
| 大和屋 YAMATOYA COFFEE | 大和屋のコーヒーを学生目線の新しいアイディアを用いて若者のファンを獲得せよ! |
| 群馬県庁 GunMaas（交通イノベーション推進課） | 私達が考える理想のGunMaaS |
| 群馬県猿ヶ京温泉旅館協同組合 | Z世代に刺さる猿ヶ京温泉のコンセプトを提案せよ! |
| 株式会社くらまえ | くらまえの紙うつわを用いて、若者世代向けの新商品を提案せよ! |
| 株式会社ジャングルデリバリー | オリーブを使って海外の人に向けて売る方法を提案しよう! |

## イベント1日目

学生たちは実際に企業を訪問して各企業の課題を理解し、社員との対話を通じて問題解決の提案を準備しました。5社のうち、2社、4チームの学生たちは、実際に猿ヶ京温泉及び株式会社ジャングルデリバリーの農園を訪問し、現場を視察しました。また、残りの3社、6チームは、高崎経済大学にて実際に経営者や担当者の方から現状を伺い、テーマの解像度を高めました。そのうえで、与えられたテーマに関する議論を行い、学生の視点から提案をまとめました。

## イベント2日目

2日目は、提案の内容をまとめて、群馬県庁でのプレゼンテーションに臨みました。協賛企業5社の審査員の方々の前でプレゼンテーションを行い、各チーム提案を行いました。また、プレゼンテーションの後には「共同プランニング」セッションを設けました。このセッションを通じて、学生のアイデアをもとに企業の皆様とも共同で議論を行い、提案内容に磨きをかけました。群馬の企業を知る新たなきっかけとなることを目指したこのプロジェクトには40名以上の高校生・大学生が参加し、イベント全体の満足度は95%と非常に高い評価を得ました。また、参加学生の85%が企業を魅力的だと感じたという結果が出ています。高崎経済大学は47都道府県から学生を受け入れており、7割の学生が県外出身です。しかし、学内では群馬県内の企業と接点を持つ機会が少ないのが現状です。今回のイベントを通じて、学生が群馬県内の企業について知るきっかけとなり、企業への理解と興味が深まりました。企業側からも本イベントは大変好評をいただきました。特に、これまで接点のなかった学生と関わり、学生目線からのアイデアを一緒に磨き上げる点に大きな価値を感じていただくことができました。本プロジェクトは群馬県内に大きな反響を呼び、上毛新聞にも掲載いただきました（11/21経済面）。

第一回目となった2023年の『その先を照らせプロジェクト』は、学生と企業の連携を深め、地域社会の課題解決に向けた実践的な取り組みとして大きな成果を上げることができました。2024年度も同様のイベントを予定しており、学生と企業が関わり続ける地方創生の新たな形を目指し活動を続けてまいります。

# 「はなみずきドッグウッドフェス」－窓花の文化体験

高崎経済大学・国際交流協会

## 1 活動の概要

2023年10月、「第1回 はなみずきドッグウッドフェス」の一環として、国際交流協会が窓花の文化体験ブースを出店しました。窓花制作体験ブースの出店では、来客に中国の春節の窓花を紹介し、制作の体験活動を行いました。このイベントは、高崎市上並榎町のハナミズキ商店街で開催され、地域住民の皆さんが集まり、交流と文化体験を楽しむ場となりました。

ハナミズキ通り商店会は、最初の段階で、高崎経済大学からライオンズクラブと合同で行う地域貢献活動に協力する学生ボランティアを募集しました。学生と経営者による新しいカタチの地域貢献活動内容の企画会議に何回か参加し、イベントの準備を進めました。

私たち国際交流協会は、このような地域との連携イベントを通じて、異文化理解の促進と地域貢献の深化に積極的に取り組んでいます。

## 2 窓花の紹介と制作体験

窓花は、中国の春節（旧正月）に用いられる伝統的な飾りで、紙を切り抜いて作成される美しい装飾品です。国際交流協会のメンバーは、この窓花の文化を紹介し、来客に実際に制作体験をしてもらうブースを設置しました。

**ブースでは、以下のような活動を行いました。**

① 窓花の歴史と意味の紹介：中国の春節における窓花の役割やその歴史的背景について説明しました。来客に、窓花が家族の幸運や幸福を祈る象徴であることを紹介しました。

② 制作体験：参加者は、用意された紙とハサミを使って、自分が好きな縁起の良い柄を選んで、窓花を作ることができました。子供から大人まで、幅広い年齢層の参加者が楽しむ姿が見られました。

## 3 交流と楽しさ

イベント当日は、多くの地域住民がブースを訪れ、中国の文化に触れる機会を楽しみました。窓花を制作する体験を通じて、地域住民同士の交流が深まりました。参加者からは、「窓花を作るのは初めてで楽しかった」「中国の文化について知ることができて良かった」という声が多く聞かれました。

私たち学生も、地域の方々との交流を通じて、様々なバックグラウンドを持つ人々と触れ合うことの楽しさを実感しました。特に、窓花の紹介を通じて中国の文化を地域の皆さんに伝えることができ、多くの方々に喜んでもらえたことは非常に嬉しかったです。イベント終了後も、窓花を持ち帰り、自宅で飾って楽しむ参加者の姿が見られました。

## 4 活動の意義と今後の展望

この活動を通じて、国際交流協会のメンバーは、地域住民との交流の大切さを再認識しました。また、中国文化の紹介を通じて、異文化理解の促進にも貢献できたと感じています。今後もこのようなイベントを継続し、さらなる文化交流と地域貢献を目指していきたいと考えています。

「第1回 はなみずきドッグウッドフェス」は、地域住民と学生が一体となって楽しむことができる素晴らしい機会でした。このような取り組みが地域の活性化と国際理解の深化に寄与することを期待しています。この活動報告が「地域・社会貢献白書」に掲載されることで、他の学生や地域の方々にインスピレーションを与え、さらなる地域貢献活動の発展に繋がることを願っています。

# 地域とともに歩む高崎経済大学陸上競技部

高崎経済大学陸上競技部

私たち陸上競技部は総勢50名が所属しており、箱根駅伝予選会や関東インカレへ一人でも多く出場し結果を残せるよう競技力向上を目標に日々練習に励んでいます。私たちがこうして日々練習に励めているのは支えてくれる地域の方々の協力があってのものです。そのため私達も地域の方々と連携し地域貢献活動を行い日頃の恩返しを行っております。そこで今回は2023年度に行った活動について紹介します。

## 「高崎経済大学競技会・長距離記録会」

2023年度にて16回目の開催を迎えた高崎経済大学陸上競技会では今年度の5月に新型コロナウイルスが5類に引き下げられたことに応じて、新型コロナウイルスが流行する前の姿に戻すことを目標に行われました。目標を達成するため、部員間の連携を徹底したことにより、声出し応援の解禁。またマスクの着用や消毒を行うことの促進を解除することなど新型コロナウイルス流行前の姿に近づけることが出来ました。

また12月には第六回長距離記録会を開催いたしました。小学生から社会人に至るまで幅広い層の選手に参加していただき、より地域の方々との距離が縮まる場として様々な交流を行えました。

これら私たち学生主体の競技会は群馬陸協・高崎市陸協をはじめ各クラブ・小・中・高校生の先生方のご協力と、市内を中心とした多くの企業様のご協賛によって開催できております。大会の運営に関してすべて私たち主体で行っているため、ご協力いただいた先生方との交流を行う中で積極的にコミュニケーションをとる機会を作り地域の方々とのつながりを強く意識することを心掛け活動しています。今後もこのような地域とのつながりについて陸上競技を通して行っていけるよう、部員一同心を込めて取り組んでいきます。

## 「審判活動について」

私たちは群馬県内で行われる様々な競技会や記録会に審判員として参加しております。群馬県陸上競技協会などの各団体からご依頼をいただき、中学生を中心とした大会からマスターズまで様々な大会に運営側の立場から参加しております。活動内容としてはそれぞれ専門的な仕事を行う部署に分かれ、大会運営を支える力となりここでも様々な人と協力し、大会に出場される競技者の皆さんが気持ちよく競技を行えるよう部員一同心をこめて審判活動を行っております。

また、この審判活動は大会関係者様との信頼関係を築く場所としても機能しております。更に各団体の方々と信頼関係を築くとともに私たちが競技会を運営する際に必要となる技術や知識を身に着ける場でもあります。また「誰かのために行うことがやがて自分のためになる」ということについて身を持って体験できる場でもあります。このような貴重な経験をこれからの社会や陸上競技の普及や地域運営に生かしていけるよう更に努力を重ねていきたいと思います。

## 「今後について」

今後の活動について2024年2月に高崎市倉渕支所地域振興課の方から「倉渕町の住民を対象としたスポーツ教室に講師として参加してほしい」という依頼をいただきました。

これは新しい取り組みであり、倉渕支所地域振興課の担当の方から直々にご依頼をいただきました。理由として担当の方は私たちが日ごろ審判活動を通して地域と関わっていることをご存じであり、声をかけて下さりました。こうして考えると私たちが地域へのささやかな恩返しをしていたことが届いたことにより新たな交流が生まれようとしていると考えられます。まず、このスポーツ教室を成功させ定期的に行えるような関係づくりを行い、新たな交流を築いていきたいです。

これからも私たち高崎経済大学陸上競技部は地域の方々との交流を通して陸上競技の普及や発展に努めていきたいと考えています。

# 音楽を通した地域の方々とのつながり

高崎経済大学直属吹奏楽部

高崎経済大学直属吹奏楽部は現在、4年生4名・3年生15名・2年生15名・1年生12名の計46名で活動しています。毎週火曜日・木曜日・日曜日の3回練習を行い、吹奏楽コンクール・アンサンブルコンテストへの参加や地域・大学で開催されるイベントへの出演、定期演奏会など様々な演奏活動を行っています。吹奏楽や楽器の経験年数は様々ですが、経験歴や学年を問わず音楽を楽しみながら部活動に励んでいます。「地域密着」をモットーに地域のイベントへの参加を積極的に行っております。2023年度は新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、新型コロナ流行前のような生活に少しずつ戻ってきたことにより、制限されることなく演奏活動を行うことができました。

## 地域への訪問演奏活動

吹奏楽部では、音楽を通して地域を盛り上げようと地域イベントへ訪問演奏を行っております。2023度は、5月に行われた「県民参加フェスタ」、「連合群馬ふれあいフェスティバル」、11月に行われた「熱血！販売甲子園」、「新町ふれあいフェスティバル」という4つの地域イベントに出演しました。小さいお子様からご年配の方まで幅広い年代の方に楽しんでいただけるように、曲目や演出などを工夫しながら演奏を行っております。地域の方々に直接演奏を聴いていただける機会であり、手拍子などの反応をいただけると非常にうれしく思います。

## 三扇祭

高崎経済大学内で行われるイベントにも参加しています。入学式・卒業式での式典演奏はもちろん、オープンキャンパスや三扇祭など大学外の皆さまにも演奏を聴いていただける機会をいただいています。三扇祭では、ステージ発表と模擬店での焼きそば販売を行いました。吹奏楽部の焼きそばは以前から三扇祭で人気の商品で、学生やご来場の地域の皆さまなど多くの方に購入していただき、模擬店総選挙では第1位をいただきました。

## 定期演奏会

吹奏楽部では、年に1回定期演奏会を開催しております。クラシックから流行りのポップスまで様々なジャンルの曲を演奏しております。2023年度で42回目となる定期演奏会は、OB・OGの皆さまや地域の皆さまから多くのご協力をいただいて開催することができました。高崎経済大学周辺や高崎の企業様、団体様から広告協賛という形で支援していただいております。また、定期演奏会の広報活動として高崎市内の中学校、群馬県内の高校にポスターを配布することや、群馬テレビやラジオ高崎に出演することなど地域の皆さまに向けた広報を行っております。

## 今後の活動について

2024年度も引き続き幅広く活動していく予定です。今年度は保育園や小学校などの教育施設でも演奏を行いたいと思っております。音楽を通して地域の皆さまとのつながりを創り出し、高崎を盛り上げられるように活動していきたいと思います。

また、吹奏楽部の活動は公式SNS（X、Instagram）やホームページ等で情報発信しております。そちらもぜひご覧ください。

# 就職活動支援における地域連携

## ● 高崎商工会議所との連携事業

### 高崎市内大学連携 合同企業説明会

地元企業ならではの情報や社員の生の声を聞き、学生の就職活動に視野を広げることを目的に、高崎市内の優良企業を招いた説明会を開催しています。

2023年度は高崎市内の9大学が連携しオンラインで開催いたしました。

### 参加企業

㈱コムテックス、㈱群馬総合土地販売、㈱群成舎、関東いすゞ自動車㈱、㈱レストランスワン、㈱有賀園ゴルフ、㈱メモリード、㈱荻野製作所、クシダ工業㈱、高崎ターミナルビル㈱、㈱田村屋、藤田エンジニアリング㈱、㈱高崎共同計算センター、細谷工業㈱、冬木工業㈱、㈱キンセイ産業、高崎信用金庫、トヨタカローラ高崎㈱、（医）社団美心会黒沢病院、㈱総合電子計算センター、赤尾商事㈱、ぐんまみらい信用組合、群馬トヨタグループ

### 高崎市内優良企業見学バスツアー

１～３年生を、対象に地元企業を見学するツアーを開催しています。高崎の魅力の１つは、元気のある優良企業がたくさんあることです。座学では得ることのできない体験をし、参加者からは「地元企業に対する関心が深まった」、「実際の現場を見ることで将来の進路選択に役立てたい」といった声があがっています。

## ● インターンシップ送り出し ―― 2023年度　官公庁へのインターンシップ実績

大学が窓口となり、官公庁のインターンシップへの送り出しを行っています。本学は公務員を志望する学生が多く、毎年多くの学生が自治体の実施するインターンシップに参加しています。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 霞が関女子学生インターンシップ | 2名 | 青森県庁 | 3名 | 太田市 | 6名 |
| 高崎市 | 3名 | 新潟市 | 1名 | 鶴岡市 | 1名 |
| 磐田市 | 1名 | 福島県庁 | 1名 | 茨城県庁 | 5名 |
| 静岡県 | 3名 | 佐野市 | 1名 | 熊谷市 | 2名 |
| 新潟県庁 | 4名 | 上越市 | 1名 | 岡谷市 | 1名 |
| 北海道庁 | 4名 | ひたちなか市 | 1名 | 富山市 | 1名 |
| 前橋財務事務所 | 2名 | 岩手県庁 | 4名 | 金沢市 | 2名 |
| さいたま市 | 2名 | 桐生市 | 2名 | 会津若松市 | 1名 |
| 栃木県庁 | 5名 | 伊勢崎市 | 3名 | 島田市 | 1名 |
| 秋田県庁 | 2名 | 群馬銀行 | 10名 | 常総市 | 1名 |
| 気仙沼市 | 1名 | 宮城県庁 | 3名 | 富岡市 | 1名 |
| 那須塩原市 | 2名 | 宇都宮市 | 1名 | | |
| 山形県庁 | 2名 | 山ノ内町 | 1名 | | |
| 豊橋市 | 1名 | 群馬県庁 | 34名 | | |



## ● 地方就職希望者への支援

U･Iターン就職や地方への就職を希望する学生に対して、「Uターン志望者向け就職セミナー」を実施しています。

また右の自治体と就職支援に関する協定を結んでいます。　※( )内は締結年月

・長野県（2015年2月）　・茨城県（2017年7月）
・栃木県（2015年12月）　・岩手県（2018年2月）
・札幌市（2016年10月）　・福井県（2022年10月）

### 【就職支援協定締結自治体との主な連携】

（2023年度）

・栃木県庁業務説明会（2024年2月）
・岩手県庁業務説明会（2024年2月）
・福井県 UIターンセミナー（2024年2月）

さらに、全国に30ある同窓会の各支部と連携し、それぞれの地区で同窓生による就職相談会を開催しています。

### 【同窓会支部における就職相談会開催実績】

（2023年度）

・静岡支部（2023年8月）
・札幌支部（2023年8月）
・長野飯田支部（2023年8月）
・長野支部（2023年10月）

高崎経済大学では、これまで、約41,000人の卒業生を送り出しています。全国から高崎に学生が集まり、各地域の企業、自治体で活躍しています。

### 令和5年度卒業生　出身地域別学生割合

| 地域 | | |
|---|---|---|
| 北海道 | 60 | 6.3 |
| 東北 | 124 | 13.0 |
| 群馬（高崎以外） | 214 | 22.4 |
| 高崎 | 78 | 8.2 |
| 関東（東京･群馬･高崎以外） | 186 | 19.5 |
| 東京 | 27 | 2.8 |
| 甲信越 | 113 | 11.8 |
| 北陸 | 39 | 4.1 |
| 東海 | 53 | 5.6 |
| 近畿 | 12 | 1.3 |
| 中国 | 3 | 0.3 |
| 四国 | 8 | 0.8 |
| 九州 | 16 | 1.7 |
| 国外 | 21 | 2.2 |
| 不明 | 0 | 0.0 |
| 計 | 954 | 100.0 |
| | （人） | （%） |

### 令和5年度卒業生　地域別就職割合

| 地域 | | |
|---|---|---|
| 北海道 | 24 | 2.8 |
| 東北 | 30 | 3.5 |
| 群馬（高崎以外） | 112 | 13.1 |
| 高崎 | 52 | 6.1 |
| 関東（東京･群馬･高崎以外） | 119 | 13.9 |
| 東京 | 383 | 44.7 |
| 甲信越 | 44 | 5.1 |
| 北陸 | 23 | 2.7 |
| 東海 | 20 | 2.3 |
| 近畿 | 34 | 4.0 |
| 中国 | 4 | 0.5 |
| 四国 | 2 | 0.2 |
| 九州 | 7 | 0.8 |
| 国外 | 3 | 0.4 |
| 不明 | 0 | 0.0 |
| 計 | 857 | 100.0 |
| | （人） | （%） |

# 教員情報　専任教員一覧（2024年5月1日現在）

本学には、幅広い分野・フィールドで研究を行う教員が在籍しています。QRコードを読み取りいただくと、「現在の研究課題」や「社会における活動・受賞歴等」など、さらに詳しい情報を閲覧することができます。

**経済学部専任教員**

| 氏名 | 職名 | 研究分野 |
|---|---|---|
| 阿久津　由佳 | 教授 | 英語教育法、語用論 |
| 阿部　圭司 | 教授 | 証券市場分析 |
| 天羽　正継 | 准教授 | 財政学、地方財政論、財政金融史 |
| 石田　崇 | 准教授 | 知識情報処理 |
| 石原　庸博 | 准教授 | 計量経済学、計量ファイナンス、ベイズ統計分析 |
| 板垣　智洋 | 准教授 | 多元環の表現論 |
| 伊藤　宣広 | 教授 | 経済学史、現代経済学、経済学方法論 |
| 井上　真由美 | 准教授 | 経営倫理、アントレプレナーシップ、コーポレートガバナンス |
| 内山　知一 | 准教授 | 社会科教育(教科教育) |
| 梅島　修 | 教授 | 貿易救済制度、WTO協定、自由貿易協定 |
| 梅田　宙 | 准教授 | 原価計算、管理会計 |
| 岡田　知之 | 准教授 | 経済成長論 |
| 岡村　晃子 | 教授 | 応用言語学 |
| 笠見　弥生 | 准教授 | 中国文学 |
| 加藤　健太 | 教授 | 日本経営史 |
| 唐澤　達之 | 教授 | 西洋経済史、イギリス社会経済史、イギリス都市史 |
| 木下　まゆみ | 教授 | 教育心理学、社会心理学 |
| 金　艶華 | 准教授 | 医薬品物流、ロジスティクス、国際物流 |
| 黒崎　龍悟 | 准教授 | アフリカ地域研究、適正技術論 |
| 小林　徹 | 教授 | 労働経済学、応用ミクロ計量経済学 |
| 齋川　貴嗣 | 准教授 | 国際文化論、グローバル・ヒストリー、国際機構史 |
| 佐藤　敦子 | 准教授 | 異文化マネジメント論、国際ビジネス研究 |
| 佐藤　敏久 | 教授 | マーケティング戦略、消費者行動、マーケティング・コミュニケーション、ブランド、競争戦略 |
| 澤田　悠紀 | 教授 | 知的財産法、文化と法、芸術と法 |
| 塩澤　康平 | 講師 | ミクロ経済学、顕示選好分析 |
| 清水　さゆり | 教授 | 国際経営論、中堅・中小企業研究 |
| 沈　律 | 講師 | 会社法、商法、合同会社制度 |
| 関根　雅則 | 教授 | イノベーション論、経営戦略論 |
| 高橋　克幸 | 准教授 | 会計学 |
| 高橋　済 | 准教授 | 空間経済学、空間計量経済学、地方財政学、公共経済学 |
| 高松　正毅 | 教授 | 言語学、日本語学、高等教育 |
| 谷川　卓 | 准教授 | 哲学 |
| 谷口　聡 | 教授 | 民法、不法行為法、成年後見制度、継続的債務関係 |
| 土谷　岳史 | 教授 | EU研究 |
| 鶴田　禎人 | 教授 | 社会保障、社会政策 |
| 富澤　一弘 | 教授 | 経済史学・歴史学 |
| 中路　敬 | 准教授 | 経済理論史 |
| 永田　瞬 | 教授 | 経営労務論、社会政策論 |
| 中野　正裕 | 准教授 | 貨幣・金融経済論 |
| 中村　彰良 | 教授 | 管理会計 |
| 夏苅　佐宜 | 准教授 | 英語教育、第二言語習得 |
| 名和　賢美 | 教授 | デモクラシー論 |
| 西川　静華 | 准教授 | 応用ミクロ経済学、ゲーム理論、産業組織論 |
| ヌルガリエヴァ　リャイリャ | 准教授 | 国際関係論、中央アジア研究 |
| 野崎　謙二 | 教授 | 経済連携 |
| 服部　昌彦 | 准教授 | 産業組織論 |
| バフトン　ニコラス　アンドリュー | 教授 | ESP |
| 藤井　孝宗 | 教授 | 国際貿易論 |
| 藤本　哲 | 教授 | 経営組織論 |
| 水口　剛 | 教授 | 責任投資(ESG投資)、非財務情報開示 |
| 溝口　哲郎 | 教授 | 応用ミクロ経済学、公共経済学 |
| 三富　悠紀 | 准教授 | マーケティング・消費者行動 |
| 宮田　庸一 | 准教授 | 数理統計学、漸近理論、方向統計学 |
| 向井　悠一朗 | 准教授 | 生産管理・技術経営 |
| 藻利　衣恵 | 准教授 | 財務会計、国際会計、会計史 |
| 森　祐司 | 教授 | 金融論 |
| 矢野　修一 | 教授 | 世界経済論、開発経済論、経済思想 |
| 山崎　薫里 | 教授 | 位相空間論 |
| 山本　芳弘 | 教授 | 環境経済学 |



**地域政策学部専任教員**

| 氏名 | 職名 | 研究分野 |
|---|---|---|
| 飯島　明宏 | 教授 | 環境科学、環境教育、環境統計学 |
| 石井　清輝 | 准教授 | 地域社会学、観光社会学 |
| 井手　拓郎 | 准教授 | 観光学、政策学、観光まちづくり、リーダー発達論、リーダーシップ論 |
| 太田　慧 | 准教授 | 地理学、人文地理学、観光地理学、GIS(地理情報システム) |
| 小熊　仁 | 教授 | 交通政策論、観光交通論、公益企業論 |
| 片岡　美喜 | 教授 | 農業・環境教育、都市農村交流 |
| 金光　寛之 | 教授 | 民法、環境法 |
| 熊澤　利和 | 教授 | 社会福祉学(障害者福祉)、緩和ケア(ターミナルケア)研究 |
| 黒川　基裕 | 教授 | 開発経済学 、商品企画・デザイン |
| 木暮　律子 | 准教授 | 日本語教育学、留学生教育 |
| 齊藤　由倫 | 准教授 | 環境社会学、地域環境政策論 |
| 櫻井　常矢 | 教授 | 社会教育学、生涯学習論、地域づくり教育 |
| 佐藤　彰彦 | 教授 | 地域社会学、地域政策 |
| 佐藤　和宏 | 准教授 | 住宅政策論 |
| 佐藤　公俊 | 教授 | 政治学、公共政策 |
| 佐藤　徹 | 教授 | 行政学、公共政策論、地方自治論、政策評価論、自治体経営論 |
| 佐藤　英人 | 教授 | 都市地理学、経済地理学、地理情報システム |
| 鈴木　耕太郎 | 准教授 | 国文学(中世神話研究)、宗教民俗学 |
| 鈴木　洋昌 | 准教授 | 地方自治、行政学、大都市制度 |
| 鈴木　陽子 | 教授 | 憲法学 |
| 関口　智子 | 教授 | 第二言語習得、通訳教育 |
| 高橋　栄作 | 教授 | 理論言語学、第二言語習得、ICT活用教育 |
| 高橋　美佐 | 准教授 | オペレーションズ・リサーチ、確率モデル解析 |
| 田戸岡　好香 | 准教授 | 社会心理学, 社会的認知 |
| 田中　宏和 | 准教授 | スポーツ政策学、スポーツ行政学 |
| 坪井　明彦 | 教授 | マーケティング論、地域マーケティング |
| 津曲　達也 | 准教授 | 高等教育、データサイエンス |
| 友岡　邦之 | 教授 | 社会学、文化政策研究 |
| 外山　昌樹 | 准教授 | 観光マーケティング、消費者行動論 |
| 長野　博一 | 准教授 | 都市政策・都市計画・地域デザイン・ユニバーサルデザイン・交通政策 |
| 中村　匡克 | 教授 | 地方財政、公共選択 |
| 倪　鏡 | 准教授 | 農業経済学、農政学、中国農業論 |
| 西沢　淳男 | 教授 | 日本近世史・地域史 |
| 原　史子 | 教授 | 社会福祉学　子ども家庭福祉論 |
| 福間　聡 | 教授 | 倫理学、社会哲学、応用哲学、死生学 |
| 増田　正 | 教授 | 政治学、地方政治論、投票行動論 |
| 丸山　奈穂 | 教授 | 観光人類学、観光とエスニックマイノリティ |
| 宮田　剛志 | 准教授 | 農政学・農業構造論、畜産経営学 |
| 森田　稔 | 准教授 | 環境経済学、エネルギー経済学 |
| 八木橋　慶一 | 教授 | 社会起業論、社会的企業論、ローカル・ガバナンス論 |
| 安田　慎 | 准教授 | 中東地域研究、イスラーム地域研究、観光人類学、観光史、観光政策 |
| 山田　真一郎 | 准教授 | 行政法 |
| 吉武　信彦 | 教授 | 国際関係論 |
| 吉原　美那子 | 准教授 | 教育行政学、教育政策論、比較教育学 |
| 米本　清 | 教授 | 都市・地域経済学 |
| 若林　隆久 | 准教授 | 経営学、経営組織論、社会ネットワーク分析 |

**地域政策学部特命助教**

| 氏名 | 研究分野 |
|---|---|
| 天野　恵美理 | 哲学 |
| 新井　庭子 | 計量言語学、認知科学、学習言語 |
| 蔡　珂 | 近代教育史、日中比較史、教育思想、近代知識人 |
| 原田　玄機 | 社会政策、知的障害、歴史社会学 |
| 藤岡　慧 | 心理計量学 |

経済学部専任教員

地域政策学部専任教員

地域政策学部特命助教

# ラジオゼミナール

高崎のコミュニティ放送局であるラジオ高崎と連携し、大学の地域貢献の一環として「ラジオゼミナール」を放送しています。

これは、本学の教員が、専門分野から地域社会の課題について紹介し、研究成果やゼミナール活動報告を交えた情報発信を行っています。

QRコードを読み込みいただくと、過去に放送された音源を視聴することができます。

76.2 RADIO TAKASAKI

ラジオ高崎　FM76.2MH z
毎週金曜日　9:30～9:44
再放送：①土　曜　日 11:15～11:29
②翌週月曜日 19:15～19:29
③翌週水曜日 10:30～10:44

## 2023年度ラジオゼミナール

※職名は放送当時

| 回 | 放送日（金曜） | 担当教員 | 学部 | 職名 | 専門分野 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4月28日 | 唐澤　達之 | 経済 | 副学長 | 西洋経済史、イギリス社会経済史、イギリス都市史 |
| 2 | 5月5日 | 山﨑　薫里 | 経済 | 教授 | 位相空間論 |
| 3 | 5月12日 | | | | |
| 4 | 5月19日 | 加藤　健太 | 経済 | 教授 | 日本経営史 |
| 5 | 5月26日 | | | | |
| 6 | 6月2日 | 熊澤　利和 | 地域 | 教授 | 社会福祉学（障害者福祉）、緩和ケア（ターミナルケア）研究 |
| 7 | 6月9日 | | | | |
| 8 | 6月16日 | 石原　庸博 | 経済 | 准教授 | 計量経済学、計量ファイナンス、ベイズ統計分析 |
| 9 | 6月23日 | | | | |
| 10 | 7月14日 | 小林　徹 | 経済 | 准教授 | 労働経済学、応用ミクロ計量経済学 |
| 11 | 7月21日 | | | | |
| 12 | 7月28日 | 高橋　栄作 | 地域 | 教授 | 理論言語学、第二言語習得、ICT活用教育 |
| 13 | 8月4日 | | | | |
| 14 | 8月11日 | 高橋　克幸 | 経済 | 准教授 | 会計学 |
| 15 | 8月18日 | | | | |
| 16 | 8月25日 | 友岡　邦之 | 地域 | 教授 | 文化社会学、文化政策論 |
| 17 | 9月1日 | | | | |
| 18 | 9月8日 | 塩澤　康平 | 経済 | 講師 | ミクロ経済学 |
| 19 | 9月15日 | | | | |
| 20 | 9月22日 | 安田　慎 | 地域 | 准教授 | 中東地域研究、イスラーム地域研究 |
| 21 | 9月29日 | | | | |
| 22 | 10月6日 | 長野　博一 | 地域 | 准教授 | 都市政策・都市計画・地域デザイン・ユニバーサルデザイン・交通政策 |
| 23 | 10月13日 | | | | |
| 24 | 10月20日 | 髙橋　済 | 経済 | 講師 | 空間経済学、空間計量経済学、地方財政学、公共経済学 |
| 25 | 10月27日 | | | | |
| 26 | 11月3日 | 宮田　庸一 | 経済 | 准教授 | 数理統計学 |
| 27 | 11月10日 | | | | |
| 28 | 11月17日 | 森　祐司 | 経済 | 教授 | 金融論 |
| 29 | 11月24日 | | | | |
| 30 | 12月1日 | 溝口　哲郎 | 経済 | 教授 | 応用ミクロ経済学、公共経済学 |
| 31 | 12月8日 | | | | |
| 32 | 12月15日 | 田中　宏和 | 地域 | 准教授 | スポーツ政策学、スポーツ行政学 |
| 33 | 12月22日 | | | | |
| 34 | 12月29日 | 清水　さゆり | 経済 | 教授 | 国際経営論、中堅・中小企業研究 |
| 35 | 1月5日 | | | | |
| 36 | 1月12日 | 木暮　律子 | 地域 | 准教授 | 日本語教育学、留学生教育 |
| 37 | 1月19日 | | | | |
| 38 | 1月26日 | 井上　真由美 | 経済 | 准教授 | 経営倫理、アントレプレナーシップ、コーポレートガバナンス |
| 39 | 2月2日 | | | | |
| 40 | 2月9日 | ヌルガリエヴァ リャイリャ | 経済 | 准教授 | 国際関係、中央アジア地域研究 |
| 41 | 2月16日 | | | | |
| 42 | 2月23日 | 倪　鏡 | 地域 | 准教授 | 農業経済学、農政学、中国農業論 |
| 43 | 3月1日 | | | | |
| 44 | 3月8日 | 山田　真一郎 | 地域 | 准教授 | 行政法 |
| 45 | 3月15日 | | | | |
| 46 | 3月22日 | 唐澤　達之 | 経済 | 副学長 | 西洋経済史、イギリス社会経済史、イギリス都市史 |



# 高崎経済大学図書館

本学では、知識のライフサイクル(創出、応用、保存、普及)の場である図書館において、快適な利用環境の向上を図るとともに、情報資源の拡充と設備の改善を進めており、その対象は、本学学生にとどまらず、ひろく一般市民にも開かれています。

## 開館時間

開館日につきましては、変更する場合がありますので本学図書館ホームページにてご確認ください。

■月曜日～土曜日　9：00 ～ 21：30
■日曜日、祝日　9：00 ～ 17：00
■春・夏・冬季休業中　9：00 ～ 17：00

### ～全国郷土資料について～

2001 年度より一般の資料とは別に「県史」・「市町村史」、地方公共団体をはじめとする全国各地の団体の発行する資料などを中心に、地域性のある資料を「全国郷土資料」として収集し利用に供してきました。図書館 4 階に電動書架を設置し、都道府県ごとにまとまったかたちで図書資料を閲覧できるように配架しています。資料には市販されていないものも多く、特色あるコレクションとして誇れる資料です。

| | 2021 年度 | 2022 年度 | 2023 年度 |
|---|---|---|---|
| 学外利用者 | 651 人 | 1,066 人 | 1,590 人 |
| 学外利用者貸出冊数 | 1,018 冊 | 878 冊 | 614 冊 |

公立大学法人　高崎経済大学
Takasaki City University of Economics

地域・社会貢献白書 2024

2024年 9月発行

公立大学法人　高崎経済大学
〒 370-0801 群馬県高崎市上並榎町 1300番地
Tel 027-343-5417（代）